

口上役の若者が引添つてゐるのを見て、

(はゝあ、あれが富士行者といふのだな)

と庄三郎は思ひ、それへ眼を止めて見た。

単のやうな鋭い眼、贅肉無く、ひきしまつてゐて、樫の木を連想させるやうな肉體——富士行者の風采は立派であり、それは、曾ての夜、落合部落の左五衛門の家の裏庭で、落合と毛間の部落民の亂闘に捲込まれた際、ほんの一瞬間見かけた、明覺行者に似てゐるやうな氣がした。

(しかし、富士や大峯や天城山などといふ深山幽谷に好んで住んでゐるといはれてゐる明覺行者が、事もあらうに、江戸の兩國の見世物小屋の舞臺へ、太夫となつてあらはれるとは?)

信ぜられない!

それで庄三郎は、尙、行者を見詰めてゐた。

もう口上役の披露ほ濟んだ後らしかつた。

手に持つてゐる拍子木をカツチン／＼叩くばかりであつた。

その様子が、

『おい太夫さん、早く藝當をはじめな』

と催促してゐるやうであつた。

しかるに行者は何んにもしないで、つゝ立つてゐる。

それで見物はソロ／＼湧きだし、

『なにをしてゐるんだ』

『はやく隠身術つてやつて見せてくんな』

『忍術をやんな』

などと囁鳴りだした。

それでも行者は何んにもしないで、眼を半眼につむり、棒のやうに立つたまゝでゐた。

(はゝあ)

(これは、わざと見物をじらせ、じれ切つた所で——心に隙の出來た所で、何かわざをやるのだな)

と思つた。

途端に烈しい音が起り、舞臺の床を打つてその烈しい音を起した巨大な御幣が、一方へ、ゆる／＼と仆れはじめた。

行者の姿は消えてゐた。

『ワーツ』

それから拍手!

見物たちは囁き――

『偉いぞ！』

『どこへ消えたんだ行者殿オ――ッ』

(これは不思議だ)

と庄三郎は思つて、先づ天井を仰いで見た。

天井へでも飛上がり、身をはりつけてゐるのではあるまいかと思つたからである。

舞臺と客席との境ひの天井下に形ばかりの淺黄の一字が釣つてあつたが、庄三郎の坐つてゐる位置が舞臺に近かつたので、一字の下から舞臺の天井を見ることが出来た。

天井には行者の姿は無かつた。

正面の、岩組を泥繪具で描いた其處にも、勿論、行者の姿は無く、舞臺の床の上にも無かつた。

(何處へ姿を消したのだらう?)

一、二分経つた。

その時、正面の、泥繪具で岩組を描いた布の一所から、その岩組の一片が剥けて落ちた。

さうして、その剥げおちた岩組の一片が、舞臺の床の上にとつてゐる大御幣の上まで舞つて來たかと思つた時、もう、富士行者の姿が、その大御幣に、馬乗りになつてゐるのが見られた。

(これは――)

と庄三郎が驚いた時には、更に驚くべきことが行はれてゐた。

御幣へ馬乗りになつた行者が、兩足で御幣を、グイト、一方へひねつた。すると、その餘勢で、行者を乗せたまま、御幣は一方へ烈しく廻つた。そこを行者は更に強くひねつたらしい。それで御幣は行者を乗せたまま、續けて一方へ廻り、さういふ行爲を行者が間斷なく行つたので、御幣は又間斷なく一方へ廻りつゞけ、それが亢じ、その廻轉の度が強くなるにつれ、何んと不思議にも、又、なんと當然にも、御幣は行者を乗せたまま、宙へ徐々に浮上がり、天井の方へのぼり出したではないか。見物たちは夢中になつて拍手し、聲を上げ、立上がつて喚く者さへ出て來た。

見よ！

富士行者は、今は御幣の馬に跨がつて、舞臺の空宙を、ゆるくと、自由自在に、飛行してゐるではないか。

(これは見事だ)

と、庄三郎は思つた。さうして、

(これは妖術でも魔術でもゴマカシでもなく、鍛錬した肉體と技術とが物理に一致した結果の贈物だ)と思つた。

やがて行者は舞臺へ下り立ち、御幣を杖つくと、穩かな丁寧な言葉で話した。

『さて皆さん、只今わたくしの演じましたことは、忍術でも魔法でもありません。あれは、練習さへしましたら誰でも出来る合理的の行ひなのであります。……私は行者です。それで富士山とか大峯とか御嶽とかいふやうな峻しい山を歩きます。そのため自然に體の膏が取れ肉がしまり、體量が軽くなり健康になります。……又、さういふ峻しい山を歩いてをりますと、山崩れだの山ツナミだの岩石落下だのといふ不意の天災に遭ひます。従つてさういふ天災から素早く遁れようとするため、いつも用心し、その結果、體の中心を急に變化させ、變化させても調和を破らないやうに稽古も積みます。……今の藝當は、それらの要素が集まつて出来あがつたものであります』

『たとへば』と云ひつゞけた。

『わたしがこの御幣の尻で舞臺の床を打つて音を立て、その音に驚いて皆さんがハツと思つた心の隙を利用し、軽い體を一飛びさせて、背景の岩組の面へはりついたところ、私の着てをります装束の色と岩組の色とが似てをりますので、調和がとれて、私の姿が隠れてしまつた。……それに私は、矢張り山登りの必要から、永い時間呼吸をしないで苦しくない修行をしてをりますので、岩組へはりついてゐる間中は呼吸をしません。呼吸をしないと、その間中は生物といふより無生物に近い存在となり、絶對的に静止しますので、いよく皆さんには私といふものゝ姿が見えない。……又、御幣に乗

つて宙を飛行したのも、不思議なことではなく、あれは……』

と云つて來たが、急に行者は言葉を切り、庄三郎のゐる座席とは反對の側にある座敷を見詰めた。しかし直ぐ行者は話をつゞけた。

『じつは皆さん方にもつといろく修行道についてお話ししたつもりでをりましたが、急に夫が出来ないことになつてしまひました。いやそればかりではない、富士行者の明覺は今日かぎりこの舞臺へ出られないことになつてしまひました。……といふのはひどい亂暴者があらはれて、この明覺に亂暴しようとするからです。……それでわたしはおいとましますが、最後に一言みなさん方に申上げたいことがあります。それは靜かな山ばかりに住んでゐたわたしが、なぜ雑踏の江戸の、このやうな小屋などへ出て、品玉（現代語でいへば手品）じみたことをするのかといふことで、それは、何事にも耐へる修行をする必要がある、すなはち、靜けさに耐へる修行をする必要があると同様に、騒がしさに耐へる修行をする必要があると思つたからです……ヤ——ッ』

と、突然、明覺行者は、片手を頭上にふり上げると、先刻見詰めてゐた座席の方へ向かひ、何やら投げ、

『預かりもの返しましたぞ！』  
と叫んだ。

宙を、鋭く、白く光つて、小柄が飛んで行つた。

(これは?)

と驚いて、庄三郎は、その小柄の後を眼で追つた。

さうしてその小柄がその座敷へ落ちようとした時、その座席にゐた見物人の頭上を抜いて、一人の武士が半身をあらはし、宙で、その小柄を受止めた。

『あ、本庄小源太だ!』

と、庄三郎は思はず聲に出していつた。

しかし、小源太は、庄三郎がさう云つた次の瞬間には、體を、見物人の中へ没したらしく、姿が見えなかつた。

さうして舞臺からは行者の姿も消えてゐた。

X

X

X

やがてこの日の宵となつた。

庄三郎は思案しいく、深川の通りを歩いてゐた。

(やはり明覚行者だつた)

今日の晝、兩國の小屋で見た富士行者が、探してゐる明覚行者であつたといふことは、彼には嬉し

かつた。

(自分で明覚となつたのだから間違ひはない。……それにしても本庄小源太があんな状態で出現して來たとは!)

### めぐりあひ

このことは意外といへば意外であつたが、しかし、明覚行者が富士を出て江戸へ行つたといふことは、静子嬢などのお喋舌りで、いづれ、毛問や落合や刑部の部落の人たちは知つたことであらうし、自分——この庄三郎が、その明覚行者を追つて江戸へ行つたといふことも静子嬢やお鳥などのおしやべりで、これ又あの地方の人々には知れたことであらう。さうすると、そのわしの明覚行者を探し出すといふ使命を邪魔するために富士へ入込んで來た小源太がそれを知るであらうし、知つたなら、やはりわしの使命を邪魔するため同じく江戸へ出て、わしや明覚行者の後をつけて、あゝいふ掛小屋へ姿をあらはすのは當然であるともいへた。

(それにしても、あの時行者は小柄のやうなものを小源太へ投げつけたが、あれは何を意味するのだらう?)

こればかりは庄三郎にはわからなかつた。

まだかな月がもう昇つてゐて、家々の家根や往來を霜のやうに白く照らし、まばらに通つてゐる人の肩などをも薄白く明るめてゐた。

彼は現在は、本郷の知人の家に寄食してゐるのであるのに、どうしてこんな深川あたりをさまよつてゐるかといふに、今日の晝、明覺が舞臺から姿を消すや、いそいで樂屋へ行つて明覺に逢はうとしたところ、もう歸つたとの事。家は何處かと樂屋番に訊いたところ、あの行者は變人で、本所の木賃宿にとまつてゐるかと思ふと深川の木場の木小屋などに泊つてゐて、住所不定、どこにゐるか見當つかないといふ返辭であつた。

そこで庄三郎はやむを得ず小屋を出て、本所の木賃宿や、安旅館などを訪ね、行者の行衛をさがしてゐるうちに宵になつてしまつたので、これから、その木場へでも行つてみよう、いまこゝをあるいてゐるのであつた。

夜風にあふられて、看板の鳴る音が何處からともなく聞えたり、大戸を下ろす音なども聞え、夜は次第にふけて行つた。

(心細いな)

と彼は思つた。

(あてのない探しものだから)

しかし、どんな苦心をしてでも明覺行者をさがし出さないではおかないと決心してゐた。まつたく、彼は、明覺行者をさがし出すまでは、葦山の江川先生の許へはかへらない決心なのであつた。

富士で、明覺行者をさがしそこなひ、江戸へ出て來た時にも、その途中、ちよつと葦山へ立寄つてそれまでの自分の行爲を、江川先生へ、中間報告しようかとも思つたのであつたが、

(いや／＼そんな悠長な眞似をする必要はない。明覺行者と連立つてこそ、先生へはお目にかゝるべきだ)

と思ひかへし、ひたむきに江戸へ出た彼であつた。

やがて代官町まで歩いて來た。

すると行手から五六人の男が歩いて來たが、庄三郎の姿を見ると囁きあひ、家の軒下へ集まり、庄三郎の近よつて來るのを待ちうけるやうな態度をとつた。

(はてな、これは變だ)

庄三郎はあゆみをゆるめた。

(をかした奴等だ。……それになんともなく見覚えのある連中らしいが……)  
それにその連中の態度に挑戦的のところが見受けられたので、庄三郎は、

(これは横道へ外れた方がいゝな)  
と思つた。

そこで、その側に右へ入る露路があつたので、そこへソロリと入り敷間すゝみ、ふりかへつた見た。その連中もこの露路へ入り、庄三郎の後をつけてくるのが見えた。

(これはいよく怪しい)

と思ひ、庄三郎は更に左の露路へ曲がつた。

すると行手から七八人の同じやうな姿の——それは職人と不頼漢とのアイノコのやうな姿なのであるが、さういふ姿の男の群があらはれて来た。

(ぐるではないかな?)

と庄三郎はうしろをふりかへつて見た。

はたして、うしろからつけて来てゐた彼等の一團は、この露路へ踏入つて、やはり彼をつけて来てゐた。

(やはりぐるだつた、どうしよう)

するとこの時うしろの一團が立止まつたかと思ふと、その中から、

『鴨下さんお久しぶりでしたねえ……わたしたちは刑部者です』

といふ聲がした。

(刑部者! 道理で見覚えがあると思つた)

と庄三郎は思ひ、相手の素性がわかつたので一安心したが、同時に烈しい怒りがわいた。

『お、刑部者たちか、では富士山腹での葛藤をいまだに根に持ち、江戸まで出て来て俺に仕返しをしようとしてゐるのか、執念ぶかい』

『さうではありません、わたしたちが江戸へ出て来たのは、あるお方の事業をお手傳ひしようとするところのあるお方のおまねきによつてですが、さて、江戸へ出て来て、こんな鹽梅に鴨下さんにお逢ひしてみると、「刑部者は、やるといつたら屹度やる」といふ例の性質が生まれてね……』

『殺さうとでもいふのか?』

『今ではそんな派手なことは考へてをりません、只あつさり「わしにも悪いところがあつた」とあやまつて下さればいゝのです』

『ならぬ!』

と庄三郎は呶鳴つた。

『悪いことをしたこともない武士たる者が、そのやうな事を申すことは決してならぬ!』

『さうですかねえ、それではどうも仕方がねえ、棒づくめにして……』

『無禮なことを申すな』

『そのあげく騒ぐらゐ詰めるかしれません。……さあ、みんなやらうぜ！』  
背後からも行手からも刑部者たちは殺到して来た。

(もう仕方がない)

と庄三郎は思ひ、刀を抜くと、行手へ馳行き、真先の一人を峰打ちで叩き倒し、間を割つて、向ふへ走り、彼等をまくために、右手の露路へ駆け込み、すぐに又左手の露路へかけこみ——この邊は露路の無数に多い裏町だったので、その露路を次から次と縫つた。

と、行手に格子づくりの長屋があり、その一軒から灯影が射してゐて、さわがしい露路の足音に不審を持つたらしい女が、格子戸の内側に立つてゐるが、庄三郎がその前をかけようとする時、

『まあ鴨下さん！ わたしはお鳥でございます』  
と叫んだ。

『ナニお鳥！』

と走りすぎた庄三郎は引返したが、

『いかにも、お鳥さんだ……それにしても、どうしてこのやうな所に？』

『それにはいろいろの事情が……いえ、わたしよりどうしてあなたがこのやうな露路などを……』

『突然刑部者どもに襲はれ……あの足音が……』

こつちへ走つてくる大勢の足音が聞えた。

『まあ、さうでしたか……では何より先に身をかくさなければ……此方へ！』

と格子戸の内へ入れ、玄關の二疊へあがり、その左の四疊半の茶間へ入つた時、刑部者らしい大勢の足音は通りすぎた。

長火鉢を間にして二人は顔を見合せ微笑した。

庄三郎は、それからボツ／＼と毛間部落のお鳥の家を出てからの自分の行動を話した。

その中で、お鳥を喜ばせもし驚かせもしたのは、明覺行者と、今日、庄三郎が、兩國の見世物小屋で逢つたといふ事實であつた。

『まあ、さうでしたかねえ』

とお鳥は複雑の表情をし、

『あの行者様が見世物の小屋へ出て。……でも、まあ夫れも、行者さまの持説の實行化と思へば不思議はありません。……あのウ、ではその時、行者様は大きな御幣を使つていろいろの藝當めいたことを？』

『さうです。その御幣といふのが六尺もありましてな……』

『あゝ、では矢つ張り、それはお母さんの御幣ですわ』

『あゝ、この前ちよつとお聞きした』

『えゝ。……母は明覚行者様にあの日御幣を取られてからといふもの、氣落ちして放心状態となり、精神の統一が出来なくなりました。従つて豫言があたりなくなり巫女としての商賣がゆきたくなくなりました。……そこで何うしても江戸へ出て、行者様と逢ひ、御幣を取返すのだと……』

『はゝあ、それで江戸へおいでになつたので？』

『さうですの。……江戸へ出てからは随分行者様をおさがししたのですけれど今日まで……まあくそれですのにそんな間近の兩國の見世物小屋などに……』

『その母上は？』

『二階ですの』

とお鳥は、天井の方を額ごしに見上げ、

『もう二間、部屋がありますのよ。六疊と八疊が。……その八疊に……』

鐵瓶の口から吹出してゐる湯氣が、猫板の上の桔梗の花に軟くあたつてゐた。

刑部者たちの引返してくるらしい足音もきこえず、あたりは秋の夜らしくしめやかに静かであつた。

『あの後、毛間と落合、どうなりましたかしら？』

わづかな滞在の間に、驚天動地ともいふべき事件に遭つた庄三郎にとつては、その事件の震源地のやうなこの二部落のその後のことが氣になるのであつた。

『それが、妙なもので……雨降つて地かたまる……あの後二部落は和解し、左五衛門さんと茂十郎さんとは親しくなり、松太郎さんとお雪さんとの結婚も近々行はれますとか……』

『それはく』

と庄三郎は、それと聞くと顔を崩して笑つた。

彼は山から掘出したばかりの水晶のやうな、純粹で透明で綺麗で無邪氣なお雪のことを思出すことに、まつたく顔を崩して、快く笑はざるを得ないのであつた。

さうして逢つてゐた期間は數日に過ぎないのであつたが、その間に醸された情愛は、産れた時から一緒に育つた兄妹のそれであつた。

(それにしても……)

と彼は思つた。

(わしを四谷沼へ沈めようとしたことから始まつたあの時の鬭争が、却つて昔から不和であつた毛間と落合の二部落を和解させたといふのが事實なら、わしのあの時の受難は無意味でなく、よい結果を産んだことになる。これは有難いことだ)



先驅者である江川太郎左衛門の門下として、師の事業を助け、千辛萬苦してゐる庄三郎は、同じく先驅者といつてよく、さういふ先驅者の艱難の餘瀝が、多くの人を——落合と毛間との部落民たちを救つたといふことは、快い當然事といつてよからう。

（お雪さんの婿になる筈の、毛間の部落の長の倅の松太郎といふ青年を、わしはまだ見たことはないが、お雪さんが承知して嫁に行かうといふほどの男なら、善良な男に相違ない。その松太郎といふ青年の方からお雪さんを見初めたのだといふことだが、あんなよい娘を見初めるくらゐの男なら眼の利いてゐる男といつてよく、さういふ二人が夫婦になつたら、これは似合ひの夫婦だ）

——かう思つてくると、又庄三郎としては顔をくづして笑はざるを得なかつた。

『鴨下さん』

とこの時お鳥が眞面目の聲でいつた。

『あなたは、葦山のお殿様のために明覺行者様をおさがしなさいませ……』

——然う、彼女は、四谷沼の亂闘の場をのがれ、半日あまり、自分の家へ鴨下庄三郎をかくまつた際、庄三郎から、その姓名だの、葦山の代官江川太郎左衛門の門弟であるといふその身分だの、その江川先生に依頼され、耐熱煉瓦の原料である良土——その良土の在場所を知つてゐる明覺行者をさがしに富士へ来たのだといふことなどを話され、知つてゐるのであつた。

『わたしの母は、行者様に取りられた御幣を取返すために、やはり明覺行者様をさがしてをります。……就ては何うでせう、これからはわたしたち一緒に力なつて力を合はせ、行者さまをさがしましては』

『これは何よりのこと、こちらからおねがひいたします』

『あ、それで、鴨下様、たゞ今はどちらに？』

『本郷の知人の家に行きます』

『ごらんのとほり、むさくるしい所であり、狭くもありますけれど、いつそわたしの所へお移りになつては……』

『は、あ、此處へ？』

『お厭？』

『決して……』

『相談しいく／＼行者様をおさがしした方が……さうなさいませ』

『……』

眞面目な庄三郎としては、女ばかりの家へ一緒に住むといふことが、氣に咎めるのであつた。

しかし考へてみれば、氣が咎めるの世間態がどうのといつてゐる時ではなく、明覺行者をさがし出すことが出来るのなら、破廉恥でない限り、何をやつてもよい時であつた。

それで、けつきよくお鳥の言葉に従ひ、庄三郎はお鳥たち親子の家へ、その翌日ひつこしてきた。  
お鳥の母親とも逢つた。

静子嬢は、いかさま弱つてゐた。

富士山腹のお鳥の家で逢つた時には、子を捕れた鬼子母神のやうな荒々しい凄じい狂人巫女の標本のやうだつた彼女が、今では、しよんぼりとしてゐて、言葉数も少なく、喜怒哀樂のあらはし方も乏しく、いつも物思ひに沈んでゐて、一緒に住むには洵に住よい、穩かなお母さんであつた。

お鳥から、庄三郎の身分と目的とを詳しく知らされ、

『それで今後は一緒に住んで行者様をさがしませうね』

といはれると、彼女はよろこび、

『よろしくおねがひいたします』

といつた。

さて、かうして一緒に住んでみると、庄三郎にとつても悪い氣はしなかつた。

煮焚きはしてくれる。給仕はしてくれる。洗濯はしてくれる。女房のやうであつた。

(これが新婚の夫婦の味といふものかな)

と時々、庄三郎は思つたりした。

庄三郎は、三人で相談の上、たゞ漫然と明覚行者の行衛をさがすのをやめて、まづご府内の行者宿を目宛てにさがすことにした。しかしその行者宿も数多くて、なか／＼にさがしきれなかつた。そのほか、修験堂や弘法宿などもさがしたが、行者の行衛はやはり知れなかつた。

この間も日が経つていつた。

さて或日のことであつたが庄三郎は、少し體に疲労も感じたので行者さがしを休んで終日家に籠もり、夕食時になつた。

膳の上をめづらしく徳利がのせてあつた。

『これは／＼』

『骨休めですの』

『いたゞきませう』

お鳥も飲み、二人は盃のやりとりなどもした。

『弾きませうか』

『派手なことだ』

酒が廻つたので二人の間に冗談なども出るやうになつた。

やがてお鳥の撥で、三味線がしめやかに鳴らされた。

下田藝者の一流として謳はれた彼女の冴えた撥音は、秋の宵のしづけさを縫つて、さうして庭で鳴く虫の音を止めて、高く低く断続した。

柿島の

宮に降る雨松の葉か

お鳥のうたふ聲も衰へてゐなかつた。

駕ちや行かれぬ

船でゆく

『旨い』

『いやですよ』

『もう一つ』

苦勞するのにも

一人はさびし

唄がすこし艶めいて來た。

その時、

『ご免』

と、門で訪ふ聲がした。

二人は眼を見合はせたが、お鳥は立つて玄關へ行つた。

土間に一人の武士が立つてゐたが、

『ワツハツハツ』

と落着に笑ひ、

『やはりお鳥だつたか。聲にも唄にも聞覚えがあつてな。俺だ、昔馴染だ』

『まあ小源太さん』

『さやう』

といつた時には、もう本庄小源太は、玄關へ上がつてゐた。

『まあ、ちよつと待つて……』

『大丈夫、心配するな、長火鉢の向側に坐つてゐる男の、誰であるかも知つてゐて來たのだ。……いや、その人に逢ひたくて來たのだ。随分さがしたぞ』

ズカ／＼と小源太は四疊半へ入つたが、

『ワツハツハツ』

と此處でも笑ひ、

『圖星だ。鴨下庄三郎君だつた。一別以來久しいな。といひたいのだがそれほどでもない。……いやそれはさうと、鴨下君、先日この露路で、刑部者たちに逢はれたさうですな。……彼等、我輩にその時のことを話したので、その亂暴を叱りつけたもの、俄にあなたに逢ひたくなり、今日この邊へ来たので、尋ねました。すると聞覚えのあるお鳥の唄聲がしたので……まづ一杯いたゞかうかな』とお鳥の坐つてゐた座布団の上へ胡座を組んだ。

庄三郎は、小源太だと知つた瞬間にはハツとして、(うつかりすると又斬合ひだぞ)

と思つたが、さて、かうして、相手とぶつかつて、相手の様子を見ると、態度にも言葉にも眼なざしにも、殺氣らしいものも、邪心もないので安心し、

『いやこれは本庄君、ほんとに珍しい。……そこで一杯……』と盃をさした。

『有難う』

と受け、

『お鳥、酌しろ、下田以來だ』

『は』

お鳥はお鳥で、これも庄三郎と同じやうに、この人を庄三郎さんに逢はせたら、どんな間違ひが起らうもしれぬと、ハラ／＼し、それまで小源太のうしろに立つてゐたが、二人の武士の間に、春風のやうな和やかさこそあれ、殺伐の氣のないのに胸なでおろし、

『お酌』

と、二人の間に坐つて、徳利を取つた。

『かけつけ三杯ぢや、それつけ』

『は』

『もう一杯』

『はい』

『旨かつたぞ。……そこで鴨下君へ返盃ぢや』

『いたゞかう』

『はい、つぎます。……本庄さんへは新しい盃を……』

と、お鳥は新しい盃を小源太の前へおいた。

『飲むぞ』

『はい』

『ところで』

と小源太は眞面目に二人を見、

『いつから夫婦になつたのぢや』

『莫迦な』

と、あわてゝ、庄三郎が、ばか眞面目に辯解しようとするのを、

『あの夜からでござんす』

と、お鳥が、これはひとを食つた、酒ア〜とした態度で、

『庄三郎さんが、刑部者たちに襲はれた晩から……』

『さうか』

と、小源太は、物を疑はない、竹を割つたやうな氣象から、

『目出度い……似合ひの夫婦だ。……我輩賛成だ。……そこで祝盃だ。……お鳥、飲め！』

『注いで頂戴』

と、いよ〜酒ア〜と、盃を出すのへ、小源太はついでやり、

『鴨下君、君も……』

と、その盃へも注ぎ、

『本庄君、君も』

と自分の盃へも注ぎ、

『健康を祝す！』

と盃を上げた。

それに、うつかり釣込まれて、庄三郎が盃を上げたのを、お鳥は横眼で見ながら、自分も盃を上げ、

『ではご一緒に……』

三人同時に飲みほした。

その盃を膳の上へカチリと置いたお鳥は、

『ほんとにねえ、こんなことが、お芝居で無くて……』

『何んだと？』

『有つてくれたらどんなによからうかと……』

『……』

『ねえ本庄さん、わたしたち夫婦に見えて？』

『見えるといつたつて……夫婦の筈だが……』

『その夫婦がねえ、夜になると、鴨下さんは二階でお休みになるし、わたしとお母さんとはこの部屋の隣の六畳の部屋で寝るのよ』

『お母さんもゐるのか？』

『え』

『ふ——ん』

と狐につまゝれたやうな顔をしたが、

『鴨下君、それは本當なのか？』

『本當だ』

と、これはひどく淡泊に平然と云つた。

『ふ——ん』

と、小源太はいよ／＼わからないぞといつたやうな顔をしたが、そこは此男の磊落の性質が働いて、

『どうでもよか、夫婦であらうと夫婦でなからうとよか。……若い綺麗な雄と雌とが同じ巢箱にトヤをつくつてをるのぢや、なるやうになるのであるぞい。……さて、それはよいとして、鴨下君にゆつくり逢へたのぢや、この邊で、僕といふ人間の素性をくはしく話し、何故、江川殿に楯つくかの原因をお明ししよう』

かう云つて来て小源太は盃を口へ持つて行き、グツと飲み、

『僕は、世間の人々から悪人の標本のやうに云はれてゐる、本庄茂平次の弟なのです』

——それから天井を仰ぎ酒氣を吐いた。

どこか態度に苦しうなところがあり、云ひにくいことを云ふ人の晦澁の様子も見えたが、天井へ向けた眼を返して、庄三郎の顔へ注いだ時には、例の物にこだわらない態度に返つてゐて、スラ／＼と話出した。

『兄、茂平次は長崎人だけに和蘭語にもちよつと通じ、西洋醫學にもちよつと通じ、商才にもちよつと長け……萬事ちよつと／＼出来る才人として、その才を用ひてもらはうと思ひ、長崎の傑物、高島秋帆先生にとり入らうとしましたところ、秋帆先生は、さういふ才人肌の人物をよろこばず、兄をしりぞけましたところから、兄は江戸へ出、つてを求め、島田甲斐守様にお出入りいたすやうになりましたところ、甲斐守様は、不思議と兄を好遇し、町人であつた兄を武士に取立て、弟の私をも武士に取立て、お屋敷内に長屋を下されました。兄はその後累進して、甲斐守様の用人格となりましたが、私は、兄と違ひ才子肌でなく木念人、そこで態のよい、甲斐守様の警護方としてくらししましたつけ。しかるに偏狹であるの猜疑心が強いのと云はれてをる甲斐守様が、わたしたち兄弟の者に對しては、それとは全然反對で、何事も打明け、生活費なども勿體ないほど豊富に下さる。感謝せざるを得ませ

んでしたよ。……これ以前から、甲斐守様と江川殿一派とは相入れなくなつてをりましたが、その原因は要するに主義主張の問題で、どつちが善、どつちが悪ともいへません。……そのうちに起りましたのが、高島流砲術を幕府において採用されたといふ江川殿一派の建白です。これを聞くと、従来幕府に砲術を以つて仕へてゐた田付四郎兵衛、井上左太夫等の輩が、甲斐守様を盟主とし、その高島流砲術——即ち西洋流砲術の採用方排斥の手段を講じました。そのあげくが、徳丸ヶ原における高島流砲術の實演となり、それは洵に見事のもので舊式日本の砲術など、とうてい及びもつかないものでありましたさうですが、それに對する甲斐守様の批評的建言も、また甲斐守様らしい見識を備へたもので、……「銃の取廻し足並は至極揃ひたれど、形の上の兒戯にて精神ともなはず、小銃備打を見るに引金強くして的中率乏し、野砲一門に八人を要するは不便なり、わが流にては二人にて足れり」その他の建言一應は肯綮にあたつてをることばかりでありましたが、しかし何んといつても日本古來の砲術と比較して、高島流砲術の格段に優れてゐることは争はれず、この點甲斐守様は無念に思はれましたが、その高島流砲術を更に江川殿が改良し、反射爐をつくり、大砲鑄造をさへ計畫されると聞き、いよ／＼無念に思はれ。……いや、その中、江川殿一派との争ひが主なる原因となつて甲斐守様は失脚、丸龜へ配流されることになりましたが、その際わしに、「そちは兄茂平次と異ひ、鈍重で意志が強い、そこでいふが、江川太郎左衛門の西洋流の大砲鑄造をして名をなさしむるな。兵制兵備の

如きは、こと／＼日本古來の物を基として改良完備すべきである」と、それから更に仰せられた。……「江川輩の如く、日本海岸を防備するに力を盡すは迂遠である。守るは攻めるにある。南洋あたり其方出て行き、そこを墳墓の地と定め、日本の勢力を、肉身を以つて其處に占め、日本の國をして、外敵一人をも上陸せしめざるやうせよ」……と、鴨下君、これが僕が君の仕事の邪魔をして、明覺といふ行者を韭山へやるまいとしてゐる理由です」

と、こゝまで云つてきて小源太は庄三郎の顔をぢつと見た。

庄三郎は、小源太の説に對して數々の反駁すべき材料や意見を持つてゐたが、しかし小源太の、事の善悪にかゝはらず、知己の人、鳥居甲斐守に盡くさうとするその日本の古武士的態度には敬意を表せざるを得ないと思ひ、黙つてゐた。

『それにしても僕は人材が欲しい』

と突然小源太は云つた。

『全く人材が欲しい。……いろ／＼の手段で人材を集めてはゐるが、人材はいくらあつてもよい。……僕は、鴨下君のやうな純情で、節義で、若くて健康な人が好きだ。……鴨下君が僕の事業を助けて同志となつてくれればと思ふのだが……あゝわが志は南洋にあり!』

ヒヨイと小源太は立上がつた。

『云ふだけ云つていゝ氣持になつた。これで俺は歸る。……そのうち、鴨下君に僕の仕事の何んであるかを見て貰はう』。

——風のやうにやつて来た小源太は、風のやうに立去つて了つた。

さて、それから數日経つた後のことであるが、東海道大森の宿の谷間に、興禪寺といふ寺があつて攝待の意味か、他に理由があるかわからなかつたが、山伏だの行者だの浪人者などを泊めてくれるので、毎夜五六人の者が泊まるさうなといふ噂を聞いて、庄三郎は明覺行者に逢はれるかもしれないといふ希望を持ち、出かけて行つた。

品川の棒鼻まで来た時、咽喉がかはいたので、掛茶屋に寄つて咽喉をうるほした。

すると、その掛茶屋の筋違ひ向ふに、構へばかり大きく、ひどく荒れてゐる屋敷があつた。土塀には落書きがしてあるし、その裾には雑草が茂つてゐるといふ有様であつた。

その時一人の若い美しい旅姿の女が來かゝり、その屋敷の前に佇み、おくれた連れでも待つのか往來の一方を眺めてゐた。

街道には、駄賃馬だの駕だのが忙しさに通つてゐる。

すると、不意にその屋敷のくゞりがあいて、老婆が姿をあらはしたが、旅の女の側へ寄ると何やら囁き、手を取つた。

女はびつくりしたやうに身を引いた。

と、今度は荒々しい武士があらはれて来て、旅の女をひつ捉へた。

女は悲鳴を上げ、持つてゐた杖を落としたかと思ふと、あわてゝ拾ひあげ逃げようと身もだえしたものの、けつきよく甲斐ない争ひで、編笠の赤い縮緒が、白い頤にかゝつてゐる美しい顔を、陽に輝かしたのを最後に、屋敷の中へ引入れられて了つた。

庄三郎は、その様子をはじめから見えてゐたが、

『怪しからんな』

と呟いた。

すると、掛茶屋の婢も見てゐたとみえ、

『あれ又一人身御供があがつたよ。……昨日も一昨日もいろ／＼の人が引込まれたが……』と云つた。

### 郊外異變

すると、

『本當か。不届だな』



と、葎の蔭の置臺に腰かけ、茶をのんでゐた編笠の武士が云ひ、  
『女ばかりを引入れるのか？』  
と訊いた。

婢は赤前垂で手をふきく、

『さうでもありません、お武家様やら旅商人やらをも……』

『うむ』

『不思議なことには、一度あの屋敷へ入つたお方は、二度とは屋敷から……』

『變だな』

『變でございます』

『話は違ふが大森の興禪寺といふ禪寺を知つてゐるか？』

『興禪寺様でございますしたら、大森の山の手の馬込の谷の底に……』

『さうか、茶代だ』

『まあ過分に……かう戴きましたは……おつりを……』

と、婢が驚いて、一分銀を握つて云つた時には、その武士の姿は店内には無く、街道數町の向ふを豆のやうに小さく歩いてゐるのが見えた。

『まあ、足の速い！……天狗様のやうだよ』

婢も驚いたらしいが、庄三郎も驚き、

(驚いたな！ 忍術者かな？)

と思つた。

しかし庄三郎は、その科學的性格から、伊賀流だの甲賀流だのといふ、古風の忍びの術などを無視してゐるので、

(ナニ、あゝいふ早足も練習から來てゐるのさ)

と思ひかへした。

(しかし、それにしても、あの武士は興禪寺のことを訊いてゐたつけ。それではあの武士も興禪寺へ行くのだらう。今夜は向ふで逢へるな)

と興味を覺えた。

茶店を出ると庄三郎は駕籠をやとつて大森へ走らせた。

さて、この日の夜であるが、その大森馬込の興禪寺(假稱)といふ禪寺の書院に七人の僧俗が集まつて雑談してゐた。

大森の馬込は、俗に『九十九谷』と稱されてゐるだけあつて、小さい谷や低い丘が無數に起伏して

ゐて、樹木は繁り、人家はまぢく、晝も物寂しかつたが、夜になると、深山幽谷のやうに凄まじく静かであつた。

七人の僧俗といふのは、一人の山伏と、一人の雲水と、五人の浪人とで、その中には鴨下庄三郎もゐた。

庄三郎は山伏や雲水へ、それとなく明覚行者のことを尋ねたが知らないといふことで失望した。

それに、その雲水や山伏は、浪人とは話が合はなかつたので、別室へ退いて早く寝てしまつた。

庄三郎は、浪人の中に、品川の掛茶屋で逢つた例の早足の武士のゐるのを見て、

(果して)

と思ひ、どういふ人物か確かめようとの興味の下に、その武士の様子へ眼をつけた。

四人の浪人は所謂『海防浪士』たちであつた。

『海防浪士』といふのは、ロシアがカムチャツカから蝦夷へかけて侵略の手をのばし、密貿易や地理の探検やらをやり出し、さらに噂によれば、イルクツクやオホツクなどでは、日本の漂流民を教師として日本語學校を設け、日本語を學ばせてゐ、隙を見て日本へ開國を逼らうとしてゐる、これらのことを案じて仙臺藩の工藤平助が『カムサツカ記』だの『赤蝦夷風説考』だのといふ書物をあらはし、ロシアの侵略の注意すべきことや海防を嚴にしなければいけないといふことを論ずるや、これが、國

内の輿論となつて論議されるやうになり、又一方、英國は先づ印度を占領し、更に鴉片戰爭の結果、香港を奪ひ、東洋に、その惨忍なる利己的帝國主義の魔手をのばし、餘威を驅つて、日本に開國を逼らうとし、更に米國は、南洋諸國、即ちキューバだのポルトリコだのフィリッピン諸島だのグワムだのハワイ等を占領しようとし、餘威を驅つて同じく日本に開國を逼らうとしてゐる。そこで益々日本國內には海防第一主義の議論が行はれるやうになつたところから、仕官の途が無く、生活に窮してゐる浪人たちは、得たりとばかりに、われも〜と海防のことを論じ、諸國を遍歴し、富豪や地方の有志などの家を泊りあるき、草鞋錢を貰つたり、饗應を受けたりするやうになり、世人はこれを『海防浪士』と呼び、一面うるさがり、他面頼母しがつたりしてゐた。

その海防浪士が、こゝ興禪寺の書院に四人集まつてゐるのであつた。

『臺閣の一部では、日本と外國との交通をひらき外人を國內に住はせ、大船の建造を許さうなどといふ議論が行はれてゐるさうだな』

『長崎奉行の久世丹後守は、バタバヤから船大工を連れてきて、日本人へ新形式の船の建造を教へようといふと計畫したといふではないか』

『いや、もう何處かでその新形式の大船を建造してゐるといふことだ』

『さうして、劍道であれ砲術であれ、何んであれ、人に勝れた技術を持つてゐる人間なら、幾十人で

も抱へて、その船へ乗組ませるといふことだ』

『拙者もさういふ噂を聞いた』

『一藝一能ある者と見ると、強引に、連れてゆくといふ噂も聞いた』

『強引に連れて行くといへば、蝦蟇屋敷の評判が思ひ出されるな』

と、四人の海防浪士たちは、寝たり起たり、又、持出して來た碁盤へ石を置いたりしながら、話して行つた。

『蝦蟇屋敷とはよく名づけたものだな、蝦蟇といふ奴、パツクリ口をあくと、飛んでゐる蠅など、その口の中へ飛込んで行く。つまり吸込まれるのだ。あの葛木三左衛門の屋敷、くいりが開くと、人を引込むさうだが、まるで蝦蟇だ。そこで蝦蟇屋敷、よく名づけたものだな』

かういつたのは、住持の好意で出してくれた酒で、顔を染め、燭臺の光で、額をテラ／＼させてゐる齋木甚兵衛といふ浪人で、

『さう人を引込んで、一體、どんな罪惡を犯してゐるのかな』  
と付加へた。

『どうせ、よからぬ事をしてゐるのさ』

といつたのは、二十八九の松山清助とななる浪人で、これは可成り酔つた躰を、四君子を描いた杉

戸へもたせ、眼を怒らせてゐた。すると、

『今日も若い旅の女を引込むのを拙者見申したよ』

といつた者があつた。

それは、寝て、片肘を頬にあて先刻からチロリ／＼と一同を見廻し、話を聞いてゐた浪人で、それは今日の晝、品川の掛茶屋にゐた、例の早足の武士であつた。庄三郎は、

(さては、この武士、そろ／＼やり出すな)

と思ひ、耳を澄ました。

『ほう、貴殿、さういふ現場をご覽なされたので……』

と、云ふ浪人があり、

『その女、美人でしたかな?』

と訊く浪人があつた。

『さやう』

と、その浪人……自分で三木頼母となのつてゐた浪人が云つた。

『美人でしたよ。……その美人、あの屋敷へ引込まれまいと随分あらそひましたが、とう／＼引込まれましたよ』

『その女だけでも助けたいものですな』

と云つたのは、一番年下だけに血の氣の多い、松山清助であり、  
『屋内の様子も探つてみたいものぢや』

と云つたのは福島彌平となる浪人であつた。

『いかゞでござらう、我々これより發足し、蝦蟇屋敷へ潜入しては……』  
これは齋木甚兵衛であつた。

『五人で参るのは大仰、それより籤でも引いて、あたつた者が参るとしては……』  
これは福島彌平であつた。

この時庄三郎が、はじめて意見を出し、

『よろづ、事は荒立てない方がよろしいやうですよ。あの屋敷の内情とて、さぐつてみましたら案内  
何んでもないかもしれませぬし、今日引込まれたといふ娘にしても何んでもないかもしれませぬ……  
それに、此處からあそこまではおほよそ二里、往復四里、時間がするぶんかゝりませう。つまらない  
ことです』  
と云つた。

すると、それに應じて福島彌平が、丁寧な口調で——それといふのも、庄三郎の風采容貌が上品で

食詰め浪人などとは違つてゐたので、

『一刻はかゝりませうな』

と云つた。

途端に、

『ナニ二刻(四時間)馬鹿な!』

と、吐出すやうに云ふ者があり、それは三木頼母であり、

『拙者なら、四半刻(三十分)で往復してみせる』

と云ひ添へた。

(さうだ、この早足の男なら、三十分で品川まで往復出来るだらうよ)

と庄三郎は思つたが、その男の早足を見たことのない他の連中はそれを聞くと笑ひだした。

『ナニ、四半刻、アツハツハツ、天狗ではあるまいし……』

『空飛ぶ鳥とて、さう早くは翔けられぬ』

『三木氏、お氣はたしかかな』

などと云つた。

この言葉の間に庄三郎は立つて襖をあけ、廊下へ出た。廁へ行くためである。

用を足し、手をすゝがうとして雨戸をあけた。  
外は中庭で、もし月夜なら、泉水、築山、石橋など、月光に照らされて美しく眺められたことであらうが、折柄の闇夜だったので、中庭は墨でも流したやうに暗かつた。  
庄三郎は手をすゝぎ、雨戸を閉めようとした。  
その途端に烈しい鏝鳴りの音がした。

『は——ッ』

と庄三郎は、思はず吐息をした。鏝鳴りの音が、胸を突きつらぬくやうに感じられたからである。一步しりぞき、暗中を睨んだ。

音は眼前六尺の邊から来たやうであつた。

それで、その邊を睨んだ。

しかし、彼の眼に見えたものといへば闇ばかりであつた。

とはいへ一道の劍氣が丸太の棒のやうに、太く頑丈に、その邊から、この身へ逼つて来るのを感じた。

(何者かたしかに其處にゐる！)

しかし、現實には、何者もゐなかつた。すくなくとも、何者の姿も見えなかつた。

そこで庄三郎は雨戸をしめ、元の座敷へ戻つて坐つた。

ところが彼の中座した間に、蝦蟇屋敷を探る人選が行はれてゐて、籤は一番年少の松山清助にあたつてゐた。

『これは——』

と、今になつて後悔したらしく清助は澁面をつくり、

『厄介なことになつたぞ』

その時庄三郎は云つた。

『よろしかつたら私ご同行いたしませう。實のところは私もあの屋敷の内情を知りたいので……』

『いや、鴨下さんがご同行下さいますなら百人力、是非おねがひいたします』

二人が庫裡から提灯をかりて戸外へ出たのは夫れから間もなくのことで、杉木立の並んでゐる道をしばらく無言で歩いた。

梟の聲がおびやかすやうに聞え、夜風が襟元を冷い手で觸れて行つた。

『つかぬことをおうかがひしますが……』

と、やゝあつてから庄三郎は云つた。

『わたくしが側に立つた後で、部屋に何か變つたことはありませんでしたかな？』

『變つたこと？ さあ……』

と清助はいぶかしさうに、

『別に變つたこととは……』

『私が座を立ちました後、誰か座を立ちはしませんでしたかな？』

『いえ』

といつたが、清助は、俄に氣付いたやうに、

『さうく、變つたことといへば、あの三木頼母といふじんが、疊へ腹這ひになつたまゝ、顔を鎌首のやうに持上げ、ピンと刀の鏗音を立てましたつけ』

『それだ！』

『え？』

『いや、世間にはいろく變つた男が……』

(全たく世間には變つた奴がある)

と庄三郎は思つた。

(あの早足！ そればかりか、部屋の中で立てた鏗音を、中庭の、間中六尺の所から立てたやうに聞かせる……あの三木頼母といふ武士何者であらう？)

二人は一里ほど歩いてきた。

すると、その時、清助の持つてゐた提灯の火が不意に消え、二人の横を旋風が砲彈のやうに通つて行つた。

いや、それは、一つの物體が砲彈のやうに通つたため旋風が起つたといつた方がよかつた。

通りすぎる時、

『お先へ！』

といふ聲が聞えた。

『あの聲は？』

『あの聲は？』

庄三郎と清助とは一緒に云ひ、顔を見合はせた。

消えたと思つた提灯の火がいつの間にかついてゐた。

『鴨下さん、何者でせう？』

『さあ』

と云つたが、庄三郎には思ひあたることがあつた。

(あの男かもしれない。……しかし何んのために？)

二人は黙々とあるいて行つた。

今の時間にして二十分足らずあるいたであらうか、今度は行手から、さつきと同じやうな旋風が吹いて来て、二人の横を砲弾のやうに通るすきようとし、旋風の中心から、クツ／＼といふ笑聲がきこえた。

庄三郎は矢庭に小柄を抜き、旋風の中心をめがけて投げつけた。

又も消えた提灯が自然とともり、旋風がうしろの方へ吹きすぎた後は、おそく出た月で、あたりが灰白く見えるばかりであつた。

『變な晩ですな』

と清助は、怯えたとみえて、少しふるへた聲でいつた。

『さうでせうか……何んでもないですよ。まだ／＼不思議なことがあるかもしれませんよ』

と、庄三郎は動じないで答へ、提灯の光の中で穩かに微笑した。

二人が蝦蟇屋敷——葛木三左衛門といふ、海産問屋の別荘の前へ立つたのは、それからしばらく経つた後のことであつた。

『やあ、是は？』

と云つて、清助は門の扉を指さした。暗い門扉の一所に、雪のやうに白い、細長いものがあつて、

それが前方に突出て、小顛ひしてゐた。

庄三郎は顔を近付けて見た。

白い羽根を付けた弓の矢であつた。

庄三郎はそれを抜きとると、うしろさまに帯へ差し、

『だから云つたではありませんか、まだ／＼不思議なことがあるかもしれない……』

と云ひ、耳をかしげて門内の様子をうかがつた。

門内はしんとしてゐた。

『裏へ廻つてみませう』

と、庄三郎は先に立つて屋敷の裏手の方へ歩いていつた。

屋敷の裏は林になつてゐて、人家は無く、林をぬけると品川の海岸に行けるやうになつてゐた。

『成程、さうか』

と庄三郎は獨言をいつた。

『何んですかな？』

と清助が訊いた。

『5分後……』

この時、屋敷の裏木戸があいて二人の男があらはれた。  
『隠れませう』

と庄三郎はいひ、清助を押し木蔭へ行き、しやがんだ。  
その側を二人の男が話しながら通つて行つた。

『ひどい屋敷だ。……追剥の集まりさね。……在所から仕入れて来た品物を、根こそぎ、ひどい値で無理に、買ひとつてしまつた』

『わしもさ。……そのうへ脅かされて、二度とこの界限へ立廻はるなと云はれたんですからね』

『そのあげく、裏口から追出され海岸づたひに立去れとはむごい』

二人は行きすぎて了つた。

『お解りですか？』

と庄三郎は云つた。

『この屋敷の正體？』

『さあ』と清助はあいまいに云つた。

『なんでもないのです。……興禪寺などと同じやうに——いや、少し異ふかな。……兎に角、貧乏な亂暴な浪人の群が、こゝで寝泊りしてゐるのですよ。……拂ひが悪いので、町内の商人が寄付かない。』

そこで、街道を通る旅商人などを無理に引入れ、品物を安く買取り、外間をおそれて夜になつてから裏口からあのやうに追出すのです』

『それにしても女を引入れるとは？』

『彼等とて、酒の時には女の酌ぐらゐ欲しい。それで……と、解釋したらどうでせう』

『は、あ』

『ほい、その女が……』

この時、裏木戸から旅姿の女が突飛ばされたやうに出て来た。

『あなたに執つては又意外のことが起りますよ』

と囁き、庄三郎は、その女の近寄るのを待ちうけた。

女は二人の隠れてゐる前を、足早にとほりすぎようとした。

『待て！』

と、庄三郎は猛然と立上がり、

『杖を捨てろ！』

女は一瞬間ぼんやりしてゐたが持つてゐた竹の杖をすてた。



『拾へ！』

女はびつくりしたやうに、しばらく躊躇してゐたが、やがて腰をかゝめて杖をひろつた。

『これ、貴様は、自分の酔興で、この屋敷を探りに入つたのか？ それとも……』

『ま、何を、旦那様！……』

『それとも町方同心の命でさぐりに入つたのか？』

『旦那様……そんな……女の身で……』

『わしは今日、貴様が表のくゞりから、この屋敷の者共に引入られるのを、掛茶屋で見てゐた。貴様は尤もらしく反抗したな。さうして杖をおとしたな。それから拾つたな……女なら、どんな下素育ちでも、どんな危険な場合でも、あゝも股を開いて物を拾ひはしない……今も然うだつた。……俄にいらへの女など、さういふつまらない所で、ポロを出す！……ところで何うだつた、いゝ獲物があつたか？』

『……』

『荒らくれ浪人ども幾人居た？』

『へい、十人ばかり……』

『大將はどんな奴だつた？』

『へい、髪を總髪の大たぶさに結つた本庄小源太といふ……』

(あッ)

と、今度は庄三郎が驚いて、あぶなく聲を上げようとした。

(これは全く思ひも及ばなかつたことだ！……あの本庄氏が、こんな事件の張本人だとは……いや、一體あの男は、何を計畫してゐるのだらう？)

彼が考へに沈んでゐる際を見て女は脱兎のやうに逃げた。

『鴨下さん』

と、清助が呆氣にとられたやうにいつた。

『あれは男ですか？』

『さうです』

と、庄三郎は氣のない聲で、

『この屋敷の評判の悪いのを聞いて、さぐりに入つた岡引か何かでせう。……しかし、近所の連中は可哀さうにあの旅の女もこの屋敷へ引入られたまゝ出て来ないなどと噂することです。……林を通らせ、海岸づたひに立去らせたではさう思はれるのは當然です。……世間の噂などといふものはかうしたものです。……もう歸りませう』

二人は往來へ出て大森の方へ引返した。

もう提燈もつけず、月夜の道をスタク／＼と歩いた。

庄三郎の明察ぶりにすつかり感心した清助は、ひどく慙懃な言葉つきで、

『鴨下さん、それにしても、どうしてあなたは、何も彼も、さう見通し出来るのです？』

『私は江川太郎左衛門先生の門下なのです。先生は、和魂洋才とでも形容すべきお方で、精神はあくまで日本的でありながら、物の見方——すなはち、事物の觀察は科學的なのです。その先生がよく私におつしやいました。「現象にとらへられたり化かされたりしてはいけません。現象の奥にある理詰めのものを見きはめなければいけない」と。……それで、私の物の見方は、いつか然うなつたのです。……ところで、今日、わたしはあの屋敷の前の掛茶屋に休んでゐました。すると、一人の旅の女——さつきの女です。……その女があの屋敷の前へ来て佇みましました。すると、あの屋敷から婆さんと浪人らしい男が出て来て、女を屋敷の中へ引入れようとなりました。女はちよつと反抗して持つてゐた杖を落とし、それを拾ひましたが、その拾ひさまが、先刻わたしがあの女へ云つたやうに、日本の女の習慣に外れてゐたので、ハハア、これは女ではなくて女装してゐる男だと思ひました。……それを、現象の奥にある理詰めのもの——換言すると真相として取入れ、それを基にして推理をはたらかせた結果、岡引か何かしららないが、男が女装をしてあの屋敷へ入つたからには、あの屋敷は怪しい屋敷に

相違ないと先づ思つたところ、茶屋の女が、あの屋敷へは、これ迄女ばかりで無く、商人なども引込まれ、引込まれると二度と出て来ないといふやうなことを云つたので、いよく怪しい屋敷だと思ひました。しかし一方、茶屋女が、諸人へそのやうなことを云ふほど、その屋敷が悪評されてゐるのに、今日まで官から咎めを受けないところを見ると、だいそれた悪事をしてゐるのでもないなと思ひました。……しかしあの屋敷へ入つた者が、二度と出て来ないといふ噂については變だと思ひました。……さて私はそれから興禪寺へ行きました。するとあなたはじめ浪人諸君が居られて愉快さうに話してをられ、その中には、數日間も、興禪寺に逗留してをられる人もあると承り、葛木三左衛門の別荘なども然うで、海防浪人衆でも泊つてゐて、自炊でもしながら海防問題を論じてゐるのかも知れない。もし然うだとすると、浪人衆のことで會計は不如意、出入商人は來なくなる。そこで行商人を呼び入れてと……』

『は、あ』

『さて、あなたと一緒にあの屋敷へ行き、裏へ廻つてみましたところ、林つゞきで海岸になつてゐる。そこで私は、ハハア、行商人などは、夜、裏門から出して、表門からは一切出さないのだな。そこであの屋敷へ入つたものは二度と出て来ないなどと噂されるのだなと……推理などと云ひましても私の推理などは、ざつとこんなもので平凡です』

『いや平凡ではありません。ちよつとした推理がその適確、あなたは實にお偉いすなあ』  
『私をかういふやうに養成された江川太郎左衛門先生こそお偉い方です』

二人が興禪寺へ歸つたのは明け近い頃であつた。

二人の話を聞かうとして、人達はまだ書院に起きてゐた。

庄三郎は、床ノ間に飾つてある矢筒を見た。

六本あつた矢が五本しかなかつた。

(やつぱり)

と思ひ、あたりを見廻した。三木頼母だけが居なかつた。そこで、

『三木氏はどうなされましたな』

と訊いた。

『三木氏は、お二人が出かけられると直ぐに、寝ると申して、庫裡の隣りの部屋へ引取りましたよ』  
と一人が云つた。

庄三郎は頷いて部屋を出た。

庫裡の隣の部屋の前へ立つた庄三郎は、しばらく佇んで、内の様子をうかがつた。

寢息さへ聞えない。

そつと襖をあけてみると、内は闇で、人のゐる氣勢さへしなかつた。でも、その向ふに、もう一部屋あるらしかつた。

そこで庄三郎は、又襖を竊つと開けてみた。

有明の灯がぼんやりともつてゐ、夜具が片隅に疊まれてゐ、その前に二人の武士が顔を寄せて話してゐた。

『あ』

と、庄三郎は思はず聲をあげた。

一人の武士は三木頼母であつたが、もう一人の武士が、本庄小源太であつたからである。

顔を上げた小源太は、庄三郎を見ると、

『お、鴨下君か、僕は君の歸宅を待つてゐたのだ。尤も、僕もほんの先刻、こゝへ來たのだが。……』

まあこゝへ來て坐りたまへ。……お鳥は無事かね？ 先夜は愉快だつた』

といつた。

側へ行つて坐つた庄三郎は、

『君は、葛木三左衛門の別荘に……』

『さう、先刻まで、あの蝦蟇屋敷にゐたのさ。……あそこは僕の同志の合宿所だからね』

『同志の合宿所?』

『さうだ、この興禪寺や……他にも設けてあるが、——攝待宿へ泊り込んだ浪士諸君の中から選抜した同志諸君の合宿所なのだ』

『それでは、この興禪寺も君の……』

『さやうく。こゝの坊主は僕の懇意先でな。それで頼んで、山伏攝待、浪人攝待の看板を出させたのだ』

『……』

『来るわく、海防浪士といつたやうな手合が。しかし、さういふ連中、口ばかりたつしやで、身の本當に付いてゐる藝といふものがないので、僕の計畫の中へ入れることが出来ない。……ところが今夜、一人、いゝ同志を發見したよ。この君で……』

と云ひながら、心安さうに、三木頼母の肩を叩き、

『素晴らしい早足とのこと、それに千里耳といふ術を心得てをられるとのことだ』

庄三郎は、そこで三木頼母へ話を向けた。

『三木氏、宵の程、私、厠に立ち手を清めるため雨戸をあけましたところ、庭上、六尺ばかりの所から鏗音がし……』

『あれが千里耳で。……いや、その千里耳の裏で。……すべて、表を知れば裏をも活用することが出来ますからな』

と、頼母は、行燈の光で、その廣い額を輝かせながら、無聲作に云つた。

『一體……』

と今度は、小源太が、角ばつた頤を突出しながら、

『早足の千里耳だのといふ術をどこで誰にお習ひなされたな?』

『伊豆下田在の、梨本村といふ所で、明覺といふ行者に教はりましたよ』

『ナニ明覺行者から?』

これは庄三郎で、その聲ははずんでゐた。

『フーンあの行者からね』

これは小源太で、さう云ふと小源太は、澁面をつくり腕を組んだ。

『拙者、その頃——尤も今も然うですが、海防論をしながら諸地方を遊歴してをりましたが、ある夏の終りに、その梨本村へさしかかりましたところ……一人の行者が、天城山の麓の、數十丈もあるやうな絶壁を、駈上つたり、駈下りたりしてゐるのです。その速いことゝいつたら。……しばらく見とれてをりますと、その行者が急に耳を澄まし「あゝ、いけない、苦心して作つた七曲りの道が、山崩

れでこはれた」と云ひました。その七曲りは、私も知つてをりますが十里も離れてをる所なのです。そこで私は、そんなに遠くにある七曲りの道の崩れたことが、どうしてわかるのかと訊いてみましたところ、「必要はさういふことを可能にするよ」と云ひました。そこで私は「わしも、あなたのやうな早足になりたい、さうして、あなたのやうに、遠くの物音を聞くことの出来る耳を持ちたい、教へてください」と云ひましたところ「では、わしと一緒に修行おし」と云ひました。そこで私は六ヶ月ほどその明覚行者の弟子となつて、一緒に修行してゐるうちに、その早足と千里耳とを自得することが出来ました」

『その要領は？』

と小源太は訊いた。

『それは言葉では云へません。行者と一緒に実践しなければ』

『千里耳の裏とは？』

と、庄三郎が訊いた。

『此方で立てた物音を、遠くにゐる人へ、身近に起つた物音のやうに聞かせることです』

『三木君！』

と庄三郎は云つた。

『小柄を返していたゞきませう』

『小柄？ はてな？』

『君は先刻、僕たちの後を追つて、その早足で、蝦蟇屋敷まで行つた筈です』

『行きました。……あれは、僕の早足を、書院にゐた諸君が信用しなかつたので、よし夫れでは例證をあげてと……謂はゞヨタ気分をつまらない所業です』

『ヨタ気分、樂天的行動！ 大いによろしい！……南洋土人相手に長期畫策をする僕達、樂天的でなくともたん！ アツハツハツ』

——これは小源太で、その小源太は、のうくと横に寝て足をのばしてゐた。

庄三郎は、

『貴殿、その歸るさに、我々の横を通り、クツクと笑ひましたな』

『いかにも』

『グツと胸に來ましたので、私、小柄を投げて、貴殿の羽織の下を通し、衣裳の背筋の邊を横に縫ひ……』

『それは知らない！』

と、恐怖じみた聲をあげ、三木頼母は、手を廻し、背へやつた。

『いかさま！ 有つた！ 小柄が！……凄く剣技！』  
まやう』

と小源太は起上がり、眞剣の顔で云つた。

『鴨下君の剣技は天才ですよ。……かういふ人が僕の事業を助けて同志となつてくれたらなッ。……あゝわが志は南洋にあり！……鴨下君、そのうち是非僕の事業を見て貰はう！』

『君の事業も拜見するが、それより君は、君の云つた品川の同志の合宿所へ、今日——いや、もう今からいへば昨日になるが、女装をした目明らしい男が入込んだことを知つてゐるかね』  
と庄三郎は云つた。

『ナニ、目明が合宿所へ入込んだ？ いや知らなッ』

と小源太は驚いたやうに、

『第一、そんな女装した男など知らなッ』

『昨日の夕方あの屋敷の門前で、君のいはゆる同志なる浪人が、酒の酌でもさせよう爲めだつたのだらうが、無理に連込んだ旅姿の女があつた筈だ……』

『あゝ、あの女か、あの女なら知つてゐる。……さうだ、あばれ者の海防浪士ども、毎日やる用もない所から、旅商人を呼びこんで値切倒して品物を買つたり、悪婆摺れた女などを引張りこんで酒の酌

をさせたりして、かなり眼にあまる所業もするやうだが、事業へ着手……つまり船出だ。船出するまではまあ〜と大眼に見てゐるのだが、……ホ——、あの女が女装した目明！……知らなかつたぞ！……さう云はれてみれば、やけに圖々しい所はあつたが……』

『その女なら、私も掛茶屋で、蝦蟇屋敷へ引込まれるのを見てゐましたよ』

と頼母は云ひ、庄三郎の顔を見、

『しかしあの女が女装をした男とは知りませんでした』

『あの女のその後の様子が知りたくて、私は蝦蟇屋敷へ、清助氏と一緒に رفتつたのです』

『兎に角目明が合宿所へ入込んだとあつては……』

と、豪放磊落な小源太が憂色を顔へあらはし、

『うつちやつてはおけない。……彼等、雑談の間にうつかりと、事業の輪廓など語つたかもしれず……それが官の耳へでも入つたら……これは困つたことになつたぜ……彼等を、我輩の隠家へでも移さなければならぬかな。……合宿所へでも手入れされたら運の盡だ』

小源太は考へ込んでしまつた。

三人はしばらく黙つてゐた。

もう 曉の薄蒼い光が窓へ射し、早起きの雀の聲が聞えはじめた。

『三木君』

と竊つと庄三郎はいつた。

『拙者に鑿音を聞かせた理由は？』

『さや——』

と頼母は額をたゞき、

『あれもヨクからで。……本人の前でかう云つては何うかと思ふが、書院へ集まつた連中のうち、貴殿ばかりが人物と見込み、それで、ちよつとためしてみればかりです……』

『提燈の火が消えたかと思ふとついたのは？』

『遠あての術といひましてな、やはり明覚行者から教はりました護身術です』

(明覚といふ行者、よく／＼偉い人物とみえる)

庄三郎はさう思つた。

枕 屏 風 風

この日庄三郎はお鳥の家へ歸つたが、明覚行者の行衛を知ることが出来なかつたことは、彼にとつては憂鬱であり苦痛であり、江川先生の寄託にそむくことを痛感しては、ゐたゞまれないやうな氣持

ちになるのであつた。

さりとして、行者の泊りさうな行者宿とか寺院とか祈禱所とか、さういふ所をさがす以外には探りやうなく、それも廣い江戸中には、さういふ所は無數にあり、一々行つて探してゐたのでは、一年もかかるであらうが、ほとんど雲を掴むやうな探しもので、根氣づよい庄三郎も、ほと／＼途方にくれてしまつた。

時には、お鳥の母の静子嬢とも相談して、行者さがしの方法を講ずるのであつたが、その静子嬢は大事な御幣を失つて以來、また江戸へ出て來てからは、以前の富士の中腹の、毛間部落にゐた頃の元氣を失ひ、物の用に立たなくなり、それでも終日ウロ／＼と江戸市中をさまよつて行者をさがすこともあつたが、多くは家の二階にひっそりと閉ぢこもり、何やら獨言を云つたり、突然大聲で、

『行者はわしに秘密の鍵を渡したと云つたが、秘密の鍵は法螺貝の管ぢや！ 行者の持つてゐる法螺貝の管ぢや！ その法螺貝をよこしもしないで！……それとも他に秘密の鍵が？……』

と喚くかと思ふと、

『御幣を行者に取られたのがわしの一生のあやまりぢや！ あの御幣がないことには、わしは木花開耶姫命様のご託宣を聞くことが出来ない！ どうともしてあの御幣を取返さなければ！……それともあの御幣に代はるものがほかにあるかしら？……有つたら夫れを！ 有つたら夫れを！』

と心細さうに呟いたり、

『でもわしは確信を失はない！ 富士のお山の何處かに、頼朝公が埋藏した莫大な黄金はきつと有る！ それを発見するのはわしぢや！……おゝそんなに澤山の黄金を発見したら何うしよう？ さうだ、わしはさうしたら木花開耶姫命様のお宮を、何より先に建立して、わしがその宮司になるのぢや！』

と、子供の夢のやうな希望を言葉に出して云つたりした。

憂鬱に沈んでゐる庄三郎と、消極的狂信家ともいふべきものになつてゐる母の静子嬢とを世話しなければならぬお鳥は、その情愛深い、その世間知りの、その寛大な性格から、そのことを苦にもしないで、毎日こまかく心を使ひ、親切にあつかつた。

そのお鳥は、富士の中腹で、道に迷つてゐる庄三郎とはじめて逢つた時から、その清淨な美貌に心を搏たれ、

(この人と親しくなつたら、妾の俗世間によこされた魂が清まるかもしれない)

と迄思つたことであつたが、かうして一緒に住んで、庄三郎の、純な、一本氣な、物事に熱心な、強い中に軟か味のある、いかにも若々しい、男らしい氣象に接するやうになつてからは、尊敬と愛情のこきまざつた、謂はゞ法悦的感情とでもいふべき感情に、日に／＼深く強く捉へられてゆくのを感

じた。

(戀ではあるまいか?)

とお鳥は庄三郎に對する自分の心持を反省することがあつた。さうして、

(いゝえ戀ではありません)

とその都度否定するのであつたが、いつ迄もこんなやうに一緒に住んでゐたいと思つたり、もし別れなければならぬやうになつたら、どんなに寂しいことだらうと、只さう思つただけでも心が凍るやうに悲しく思はれたり、庄三郎が行者さがしに行つて、自分が留守を守つてゐて、久しく經つても庄三郎が歸宅しない時など、イラ／＼するほどその歸宅の待たれたり、さうして庄三郎が歸つて来て、それを迎へて顔を見た時のワクワクするやうな嬉しさや、衣裳を脱がせたり、それを疊んだりしてやる時の、充ち足りたやうな心の喜びや、さて夜となつて差向かひで食事をする時の、なごやかな氣持——さういふ喜怒哀樂を思へば、

(やつぱりわたしのお方を愛してゐるのだわ)

と思ふのであつた。

彼女の一番恐れてゐることは、庄三郎が明覺行者をさがしあて、韭山へ連れ歸り、母の静子嬢も、御幣を取返し、毛間部落に歸るのについて、自分も毛間部落へ歸り、自分と庄三郎とが自然と別れ別



れとなり、共住み出来なくなるのであつて、それで、

『今日も明覺殿の行衛わかりませぬよ』

と落膽して歸つて来る庄三郎を見ると、

『それは残念のことですぞいませぬね』

と口では云ひながら、

(まあよかつた、少くも今日と明日とはこのお方と一緒に居ることが出来る)とホツとした氣持になることであつた。

いつか彼女の心は、庄三郎が永久に明覺行者をさがし出すことが出来ないやうにと、それを希望するやうになつてゐた。

しかし時々には聰明な彼女は反省し(いゝえ、それではいけないわ、さういふ心持は、立派なお方を、私の卑しい占有欲で捕へて置くといふことだわ。……わたしの愛情が本當に清らかで深いのなら、あのお方の、明覺行者をさがし出して蕪山へつれ歸るといふご使命を遂げさせるため、神様にお願いしたり佛様におねがひしたりして、一緒になつて、行者様をおさがししなければいけないだわ)と思ひ、

(さうしよう!)

と決心もするのであつたが、さう決心をした途端に、彼女は悲しくなり寂しくなり、その時、もし彼女が裁縫をしてゐたとすると、針の手を止め、縫つてゐる着物の上へ、涙をこぼすのであつた。

でも、彼女の本當の心の奥底にある感情といへば、諦めであつた。

(庄三郎様は立派なお侍さまで、江川先生のご門下、日本の國のお爲めに將來大きなお仕事を遊ばすお方、それに反して私は、富士の麓の部落の巫女の娘、身分違ひ! どう悶えても夫婦などにならない二人ではない。かうして一時なりと、ご一緒に住んでゐられるのを光榮と思はなければならぬ身分……)

(……だから、一緒に住んでゐる間に、あらんかぎりの誠心を捧げ、別れた後でもあのお方から「昔、お鳥といふ女があつて、ゆくりなく一緒に住んだことがあつたが、よく盡くしてくれ!」と、永く思ひ出していたゞけるやうに!……それをせめてもの慰めとして、お盡ししよう、お盡ししよう)

かういふ可哀さうな、いぢらしい諦めの感情なのであつた。

彼女は庄三郎へよく盡した。

彼のために、枕屏風を買ふといふところまで進んだ。

といふのは、それは、庄三郎が大森の興禪寺へ行つた日から十日ばかり経つた、さわやかな、ほんとに初雁でも渡つて來さうな日のことであつたが、彼女は町へ用達しに行き、表具屋の前へさしかゝ

つた時、その店さきに、浮世繪を張りまぜにした、可愛らしい枕屏風のあるのを見て、  
(これからは秋も深くなり、夜など、あのお方の枕元、隙も風でお寒からう。あれを買つて、立て  
てあげよう)

と買ったことである。

さて家へ歸つて来て、茶ノ間へ飾つて、あらためて眺めた。

富士を描いた東海道とうかいどうの繪が、はりませの浮世繪の中に一枚あつた。

(いゝわね、富士山！ 見ついても心がすかしくなること！)

富士のお山の子である彼女であつた。枕屏風の繪の中に、それが有つたことが、矢張り嬉しかつ  
たらしい。

(庄三郎様、早くお歸りあそばせばよいに……見せてあげて、よろこんでいたゞくものを……)

さう、この日も庄三郎は、行者さがしに出かけて留守なのであつた。  
でも夕方歸つて来た。

『ほう、これは可愛らしい屏風ですな』

と、長火鉢の前に坐つた庄三郎は、この日も、行者の消息を知ることが出来ず、憂鬱になつてゐる  
心を開いて、笑ましげに云つた。

『あなた様の枕元へ立てませうと、それで……』

『それは……いつもながら……』

庄三郎は、何か濟まないやうな氣がし、心苦しいやうな氣もした。

(たえずこまかく心をくばり、わしに盡してくれるお鳥！ その心持はわかつてゐる！……何んとか  
して酬ひねば……)

従来眞面目一方で、女色には恬淡で、賣女にもしろうと娘にも、深く接したことはなく、女の微妙  
な戀心とか、情愛などには、無關心の彼ではあつたが、さすがに毎日同じ家にゐて、共住みして、そ  
のこまかい心やりに接してゐるお鳥に對しては——お鳥の心持は、察することが出来た。

(わしを愛してゐるらしい)と。

しかし自分には大事な使命がある。それに、夫婦などには、一時的の感情で、かるはずみに、さう  
でもない女と、成るものではない。まして、夫婦以外の、その場かぎりのちぎりなど結ぶものではな  
い。それで、

(お鳥の、わしへの愛情へは、何か別のことで酬ひねば)

かう考へてゐる庄三郎なのであつた。

やがて夕飯の膳がととのへられた。

『お母様、ご飯でございます』

とお鳥は二階へ聲をかけた。

すると二階から、

『わたしは後で……』

といふ静子嬢の返辭がした。

これは毎々のことで、若い男女を、二人だけで、楽しく夕飯をたべさせてやりたいとの、情深い母の心づかひからか、それとも、心の結ばれてゐる嬢としては、一緒に賑やかに、若い男女と夕飯をたべるより、一人で、後で食べた方が、心もおちつき、氣も樂だといふところからか、大概は、いつも二人より遅れて食べ、食べて了ふと、階下の奥の部屋で寝るのであつた。

庄三郎とお鳥とは箸を取つたが、

『變なお母様、一緒におあがりなさればよいに』

『さやう』

と庄三郎も云つたものゝ、

『あゝいふ氣象のお母様、それに狂信家、自由にさせておあげした方が。……あゝしてをりますうちに、何かの機會で、精神力を取返し、昔のやうに、その口寄が——豫言が、あたるやうになるかもし

ませぬ』

『さうでせうか』

『豫言は直感から參り、直感に精神力の統一から參るものですから……』

『そんなものでございますかねえ』

夕飯を終へ、夜もふけた。

子ノ刻の鐘がやがて鳴り、世間一統寢しづまつたか、足音もきこえなければ、隣家での物音もきこえなくなつた。

その時、梯子段を下りて來る足音がし、すぐに静子嬢がこの部屋へ姿をあらはした。

嬢は、急に足を止め、眼を一所へ据ゑた。

その視線の止まつた所にあるのは、例の枕屏風であつた。

と嬢は、ツカ／＼とその枕屏風へ近よつて行つたかと思ふと、その前へピタリと坐り、尙、屏風の一所へ眼を据ゑてゐた。

その視線のとゞまつた所にあるのは、富士山を描いた浮世繪であつた。

『お山！ おゝ富士のお山！』

それは、さながら、迷子になつてゐた子供が、お母さんの姿を目付けた時のやうな聲であつた

が、さういふ聲でさう叫ぶと、静子媼は、俄然、その富士山の繪の前へひれ伏した。  
見れば、烈しい感動で、彼女の全身は顫へてゐる。やがて顔をあげたが、その表情は、すっかり變つてゐた。

眼は見ひらいてゐるものゝ、何物をも見てゐないやうであり、口は、今にも、何か大聲で叫ぼうとでもするかのやうに開いてゐた。

その表情は、毛間部落にゐて、神がかり状態になつて、よくあたる豫言をしてゐた頃の表情と同じであつた。

忽ち彼女は叫び出した。

『おゝわしは、お江戸へ来てから物にかまけて、お山を拜むことを忘れてゐた。一度もしみくと拜んだことがなかつた！ 何んといふわしはおろそかな人間だつたらう！……だからこわしは、ご託宣をお受けすることが出来なかつたのだ！……おゝ、わたしは久しぶりでお山を拜むことが出来た！……神靈いやちこ！ おゝ明覺行者の姿が見えて来た！……行者はあそこにある！』  
明覺行者に大事な御幣を奪はれたり、奪つてやらうと心掛けてゐた明覺行者の法螺貝を奪ひそなつた事やで、精神が分裂してゐたのが、信仰してゐる富士のお山の繪を見たゝめに、俄然、精神が統一され、直感力が恢復し、千里眼的作用が働き、明覺行者の居場所が、心の眼に映つて来たといふ

ことは、心理學の上でも證明されることであつて、事實、静子媼の心眼には、現在、今夜、明覺行者の居場所が見えてゐるに相違なかつた。

媼は、尙叫んだ。

『おゝ、わしの御幣も見える！ 行者の膝の横にある！ 法螺貝も見える！ 行者の膝の上にある！……その行者は、あんな所で、あんな人たちに取巻かれてゐる！……わたしはあそこへ行かう！ さうしてあの二品を取つてやらう！』

猛然といふ形容詞が似合ふほどの劇しい勢ひで媼は立上がり、立上がった時には部屋を出てゐた。すぐに表の戸の開く音がした。

『お母様ア——ッ』

とお鳥は躍上がり、庄三郎は、

『しめたぞ！ 媼の直感力恢復したぞ！ 媼があゝいふからには、明覺行者の居場所、媼には解つてゐるに相違ない！ 後を追つて！』

と、側の兩刀を腰にたばさむや、すぐに戸外へ走出した。

『鴨下様ア——ッ』

と、つゞいて、お鳥も門口から走出した。この深夜に、江戸の町を、女の身で、狂人さながらの身

で、喚き走られたでは世間迷惑！ いや夫れよりも、肝心の母の身上にも、しものことがあつては一大事！……それに、鴨下様が走つて行かれた！ あのお方のお身上に、怪我でもあつては！……この二通りの心やりから、戸外へ走出たお鳥であつた。

媼は、星空の下を、お、何んと速い足で、獣のやうに走つて行くことか！  
(見失つては一大事！)

媼の後から走つて行く庄三郎の姿も、獲物を追ふ獵犬のやうであり、その庄三郎のあとを慕つて、あへぎ／＼走るお鳥の姿も……

この頃、月島と向かひあつた、越中島の一所に空家があり、その空家の中で、數人の男女の話聲がきこえてゐた。

空家の前方には、道をへだて、品川の海が、星を浮べて横たはつてゐ、その向ふに、巨大な鯨のやうな月島が盛上がつてゐ、雄大な景色を呈してゐたが、空家のまはりには人家が少く、その人家も、その空家とは距離をへだてゝゐたので、その空家で、多數の人が話してゐても、人に氣づかれる心配は無かつた。

空家は古びいたんでゐて、軒や、横手の壁には、さゝへの棒などがかつてあり、借手がなないので、むを得ず空家にしておくのだといふやうな、廢家であつた。

その中から人の話聲が聞えて來た。

『では、千里耳といふことについて話してやらうかのう』といふ聲がきこえた。  
明覺行者の聲であつた。

### 空家の中

『千里耳といふのは遠くの物音を細かく聞き取る術のことぢや』  
と行者の聲が又いつた。

戸外は星月夜でぼんやり明るかつたが、空家の中は、墨でも湛へたかのやうに暗く、人の姿も、物の形も見えなかつた。

でも、もし、一本の蠟燭でもあつて、それがともされたとしたら、例の御幣を膝の横へ引付け、例の法螺貝を膝の上へのせた明覺行者が、古び、微の生えてゐる破疊の上に坐つてゐ、その前に、悪い病氣をしてゐる夜鷹や、垢だらけの體へ菰を着てゐる乞食や、立ん棒や、猫の蚤取りといふ果敢ない商賣をしてゐる爺さんや、小泥棒や、縫り合つてシク／＼泣いてゐる心中の仕損ひの男女や、破戒をして傘一本で寺を追出されたらしい坊主やが、七八人、坐つたり胡座をかいいたり、横になつたりしてゐるのが見られることであらうし、缺けた茶碗だのめんつうだの、口の取れた土瓶だの箸だのと

いふやうな物が、ころがつてゐるのも見られるであらうし、更にそれらの人や物を圍んで、雨もりの跡のある天井や、破れて骨をあらはしてゐる襖や、これも破れた後を古曆などでつくろつてある壁などをとも見られるであらう。

しかし、燈火のない現在の空家の中は、たゞ暗く寒いばかりであつた。

『十里も二十里もへだたつてゐる遠くの物音を聞きとることが出来るなどといつたら、お前さんたちは、又、明覺の駄法螺かといつて笑ふかもしれないが、そんなことはない。「必要は物事を可能にする」といふ原理があるのだから。でも、こんなことをいふと、たいへんむづかしいことのやうに聞えるだらうが、そんなことはない。例をあげれば、わしは山あるきばかりしてゐる行者なので、よく土崩れや石崩れに逢ふ。ぼんやりしてゐると、その下敷きになつて死んでしまふ。そこで、その難からのがれようとする方法を講ずる。それには先づ何より、土崩れや石崩れが、高い遠くの山の峰で起つたのを、その物音で知らなければならぬ。幾度も経験してゐるうちに知ることが出来る。……さてそいつを知つたとすると、今度は夫れを應用すれば、いつそう遠くのところで起つた物音を知ることが出来る。……さうなのだよ、十里も二十里もはなれてゐる別の山や谷で起つてゐる物音——山崩れや石くづればかりでなく、二匹の猛獸の噛みあつてゐる音でも、谷川の水がはらんする音でもききとることが出来るのさ』

『あゝそれなら妾にだつて出来るわ』

といふ女の聲がした。

『今夜あたり馴染のお客さんが來さうだなと思つてゐると、ずつと遠くの露路を此方へ歩いて來るその人の足音が——遠いのだから聞える筈ないのだけれど、きこえるわ』

『さうとも〜』

と行者の聲が云つた。

『それも千里耳の一種さ。……ところで、わしは、どうもお品さんの商賣、夜鷹といふ商賣が氣に入らないのだがね』

『おやマア何故でせう』

すると『おやマアはないでせう』と誰やらがまぜつかへし、二三人が笑つた。

『直接お品さんの商賣を攻撃するより、わしは別の方から話してみようと思ふよ』  
と行者の聲がいつた。

『それは、これはわしの持論だが、人は、誰でも一本づつ心のものさしを持つてゐなければいけないと思ふのだよ。ところで、そのものさしはどんなものさしかといふに「みんなの爲になるかどうか？」といふものさしなのだ。……さて、では、こゝでお品さんの商賣の方へ話を持つてゆくが、お品さん

の商賣、みんなの爲になるかな？」

『……………』

お品の聲もきこえず、誰の聲もきこえなかつた。

『わしには、みんなの爲にならないと思ふのだがな』

と、やゝあつてから、行者の聲がさう云つた。

『第一、そんな商賣をしてゐるとみんなの風儀を亂し、いやらしい病氣を蔓延させ、本人——お品さん自身も厭な病氣になり、それに人口をふやさなければならぬ日本の國の人口を減らすともふやさない。……よくないのう』

家の中がしんとあつて了つた。

いつもは人氣がないので、従つて食物がないので、住んでゐない鼠が、今夜は、この人達がゐて、飲食ひしたゝめ、動物の本能で、その食物のあまりを掠奪しようと思つて來たと見え、隣室や、襖の蔭などから、その啼聲や、走りまはる音やがきこえた。

『行者どん』

と、その時、卑しい、ひとを食つたやうな聲で云ふものがあつた。

『俺ア乞食だが、乞食つていふ商賣、その「心のものさし」つてやつで計ると、どんな恰好になるか

ね？』

『乞食は商賣ではなくて、只一つの行ひだのう』

といふ行者の聲がきこえ、

『この行ひ、心のものさしで計ると、一方ではよい行ひとなり、他の方では悪い行ひとなるのだよ』

『いゝ行ひの方から聞かして貰えてえものだ』

『よろしい。……先づ、お釋迦様はじめ、佛敎のいろ／＼の偉い人が、みんな人の家の門に立つて乞食をしたといふことがあるが、この乞食はいゝのう』

『ナールほど』

『それは、人に慈悲心を起させる行ひだからちや』

『へ——』

『さうであらうが、一握の米であらうと一文の錢であらうと、持つてゐる人にとっては大切な寶ぢや。その寶を他人に與へる慈悲心を起させるのが乞食ぢや。——とかう考へて來ると乞食といふ行ひはたいしたものぢや』

『さうともく大したものぢや』

『ところが、そんなつもりでなくて、立派に働ける體を持つてゐながら、働くのが厭なばかりに、人

家の門に立つて食を乞ふ乞食！ こいつは穀つぶしといつて悪ひ行ひの代表ぢや！』

『わしの乞食、どつちかのう』

『心のものさしで計つてみな』

これで乞食は参つたとみえて黙つてしまつた。

あちこちから笑ふ聲が起り、闇の空家の中が少し動揺した。

その時、

『俺ア泥棒だが、義に缺けた事アしねえ』

といふ聲が聞えて來た。

『俺ア、強慾の金持の所から物や金を盗み出して來て、貧乏の人たちに恵んでやるのだ。俺ア義賊だ

……行者さん、俺の行ひは善いかね、悪いかね』

『悪いのう。……お前さんは、義だの義賊だのといつてゐるが、かんじんの義といふものゝ意味を知

らない。義には二通りある。大義と小義ぢや。……大義とは君國のために自分の一切を犠牲にして盡

すことぢや。小義とは自分一身を潔くして、他人に迷惑をかけぬことぢや。……他人の大切な財寶

を盗む泥棒！ そのどつちにもあたらないではないか！ 何が義ぢや、何が義賊ぢや！……よしんば

盗んだ錢金を貧しい人たちに恵んだとしたところで、それは自分の恥づべき行爲をいくらかでも慰め

ようとする、卑怯な行爲にしか過ぎないのぢや』

『いや違ふ。そんな……』

『心のものさしで計つてみな……』

『心のものさしで計つても、わしは決して……』

その途端に、暗中へ、何か、グーツと振上げられたやうな氣勢がし、次の瞬間

『わツ、痛え！』

といふ泥棒の悲鳴が聞え、

『痛棒ぢや！ 身にしみて有難いと思へ！』

といふ明覺行者の、威嚴を持つた聲が響いた。

『あツ』といふ聲や、溜息や、立上がらうとして、又坐つたらしい物音が、暗い部屋のあちこちで起

つたが、やがてしんとなり、一撃をくらつて疊の上へたばつたらしい小泥棒の呻聲が、斷續してき

こえるばかりであつた。

『静子媼の御幣も、いろ／＼のことに役立つのう』

と、やゝあつてから、行者の、獨言のやうな呟きの聲がきこえた。

『ある時はわしを乗せて谷を渡つたり、或時はわしを乗せて、見世物小屋の舞臺で、宙に浮かんだり、



今は今で、心のものさしを持つてもゐない癖に、持つてゐるやうに強辯し、心のものさしで計つても泥棒といふ行ひが恥かしくないなどといふ不届の小泥棒の肩を撲つたり、いや静子嬢殿の御幣、いろいろわしの役に立つてくれるよ。……いゝ事ぢや！ 人ばかりではない、物も廣い世間へ出て、いろいろの世界を経験し、いろ／＼の人に使はれることによつて世間を知る必要があるからな。……コレ御幣よ、いつの日か、お前は静子嬢の許へ歸るであらうが、歸つたら、静子嬢へ云つておやり、世の中は廣い、お嬢さんのやうに、家の中の木花開耶姫命様の御前ばかりにひざまづいて、その御託宣ばかりを承はつて、行動するものではありません、わたしのやうに、谷を渡つたり宙に浮いたり人を撲つたり、要するに生きて世間の荒浪をしのいで、世間を知るがよろしうございますと。……ところでわしは、見世物小屋の太夫さんの役目を自分で辭任してから、直ぐこの空家へやつて来て、ここで寝泊りして、自然と集まつて来た皆さん方と一緒にくらし、くだらないお談議めいたことを云つて今日までくらしして来たが、その皆さん方も、いよく今夜でお別れぢや。……といふのは、わしを捕へようとする一組の男女が、間もなくわしのこの居所を突止めて捕へに来るからぢや。……そればかりならまだよいのだが、もう一組の氣味の悪い手合が、矢張りこの方へやつて来るからぢや。……』

行者はこゝで沈黙した。戸外の物音へ耳を澄ましてゐるらしい。

しかし戸外からは、海から吹いて来る風の音が聞えて来るばかりであつた。

『まだ大丈夫ぢや、まだ来ない』

ふいと行者の聲が、やゝあつてから聞えた。

『それでは、最後に、お別れに、わしが山修行の結果自得した遠あてといふ術のことについてお話ししようかの。……遠あてといふのは、柳生流の劍道の極意にある氣合の術と同じで、この術を會得すると、氣合だけで敵を倒すことも出来れば、空を翔けてゐる鳥を落とすことも出来、ともつてゐる灯を消すことも、消えた灯をつけることも出来るのぢや。……さうして是とて、さつき云つたやうに、必要から可能になつた術なのぢや。……といふのは、山修行をしてゐる中には、いろ／＼の魑魅魍魎と逢ふ。そいつらに一々此方の姿を見せてゐたではおつゝかない！ そこで遠くから、此方の氣合で——氣合は精神ぢや！ その精神であつて、退治了ふ！……待て！ 二組の、わしを捕へようとしてゐる連中が近づいて来た！……待て！ 聞かう！』

行者も黙り、人々も沈黙し、空家の中は、食を求める鼠が啼いたり走り廻つたりする物音以外には音らしいものも、聲らしいものも無くなつてしまつた。

海！——といつても、月島と、この越中島との二つの陸にはさまれてゐる小海峽を、傳馬船か荷足船かど通るとみえて、櫓の音が、雁の啼聲のやうに聞えるばかりであつた。

『まだよい、まだ来ない。……では……』  
と、又、行者の聲が云つた。

『では、いよ／＼最後のお別れに、わしの本當に云ひたいことを云ふことにしよう。それは「全體あつての個體」といふことぢや！……これも例を引いて云はうかの、たとへば一本の草ぢや、この草も自分一人だけでは生きてゐられない。土だの水だの日光だのがあつて、草の根を養ひ、草の葉や莖を生長させるから生きてゆくことが出来るのぢや。……また石をこらん、石といふやうな命の無いものさへ、石だけでは存在しない。石の中には酸素だの窒素だの硫黄だのといふ、いろ／＼の元素が含まれてゐる。もしその元素たちが、わしは、こんなところに、みんなと一緒にゐるのは厭だといつて、立去つたならば、石そのものは無くなつてしまふではないか。……さて人間もさうぢや！ 自分一人だけで生きてゐると思つてはとんだ間違つたことになる。……先づ両親があるから産まれたのぢや。次に社會があるから衣食住の融通が出来、同じ血液、同じ皮膚の色をした同じ民族があるから外敵を共同して防ぐことが出来、その上に國家といふものがあつて、外國と對抗してくれるから、毎日を安心して、大威張りでくらすことが出来る。その民族や國家の上に——一切の上に御居で遊ばすのが、天子様で、皇統連綿萬世一系の天子様が御居で遊ばすので、世界一偉い大和民族として生きることが出来る。……ご覧、われ／＼の上にも周圍にもこれほどの條件があつて、やつとわれ／＼は生きて行

けるのぢや。……だから、われ／＼は何より先に、みんなの爲になることを計らなければいけない。みんなの爲になることをして、やうやく自分といふ個人が生きられるのだよ。……来た！ 二組の人達が！ おさらば／＼！』  
行者の立上がる姿が闇の中に感じられた。

### 傍若無人の群

空家がかういふ事が行はれてゐた時より、もう少し以前から越中島の通りを、一群の人数が、空家の方へ歩いてゐた。

それは本庄小源太と、彼が集めた同志の浪人たちであつて、浪人の数は十一人で、その中には例の早足の三木頼母もゐた。

これらの浪人たちは、今日まで例の品川の蝦蟇屋敷に合宿してゐたのであつたが、女装をした目明らしい男が入込んだ日以来、怪しいことが數々起つた。すなはち絶えず數人の目明らしい男や、それに使はれてゐる下ツ引らしい男や、時には同心らしい武士までが、その屋敷の周圍を立廻つたり、それ迄は敬遠してご用など聞きに來なかつた近所の酒屋だの八百屋だの、ご用聞が、しげ／＼やつて來て、ご用をき、ご用をきながら家内の様子をそれとなくうかがつて行くのであつた。

(これは不可ない。これは何うやらこの屋敷はその筋に眼をつけられたらしい。手入れされるかもしれない)

と思ひ、手入れされない先に、浪人たちを、自分の借りてゐる月島の隠家へ移さうと、今夜こつそり一同を蝦蟇屋敷から連出し、こゝまで来たのであつた。

小源太を加へて十二人の武士たちは、人目につかないやうに、人家の軒づたひに歩いたり、一人一人バラ／＼になつて歩くかと思へば、四五人塊まつて歩いたり、又は幾人かゞ横道へそれ、それから或時間経過した時、又一緒になつたりして、充分神経をつかひ、用心をし、可成りに遠い品川から此處まで辿つて来たのであつた。

彼等の或者は六尺棒を羽織の下にかゝへてゐた。それは鹿島流の棒を上手につかふ浪人であつた。或る者は、羽織の下へ、帯へ、十手を差してゐた。それは吉岡流の十手を巧みに使ふ浪人であつた。

さうかと思ふと或浪人は、右の首から指先まで白布で捲いてゐた。それは怪我をしたのではなくて、唐手の名手で、いつも右手を大切に保護してゐる結果なのである。

十一人の浪人が十一人ながら、何かしら人に優れた一藝を持つてゐるのであつた。これは小源太が、

『大言壯語ばかりしてゐて身に一藝をさへ備へてゐない奴は駄目だ。犬のやうに忍びこむことが上手だとか、鶏の啼聲の真似が旨いとか、そんな變なものであらうと、それが他人より優れて、身に付いてゐたら、用ゐるに足る。……第一他人より優れた藝境へ達するには、なみたいていの修行ではおつゝかない。さういふ修行をしたことだけでもその男は偉いのだからな』

といふ持論を基にして、同志選擇をした結果であつた。

小源太は、三木頼母と並び、他の人々の先に立つて歩いて行つた。

やがて、左手に露路のある所へ出た。

その露路から、不意に龕燈の光が射して来て、總髪、白袴、黒の羽織の小源太の姿を照らし出した。

小源太は素早く、その光の圏内から走つて遁れ、頼母はそれにつゞいた。

この時、少し遠い所から、呼笛の音が響いて聞えた。

『三木君、變だな』

と小源太は、その呼笛の音に耳を澄ましたながら、

『呼笛も變だが、龕燈の光も變だ』

『さうですよ』

と頼母も不安さうに、

『爺燈の光といひ呼笛といひ、今ばかりではないのですからね』

『さうだ、佐久間町の辻でもやられた』

『品川の屋敷を出てからずつと變なことばかりですよ』

『さうだ』

——そのとほりなのであつた。品川の蝦蟇屋敷を出ると、すぐ、何者かに、それも大勢の者に、尾行され、圍繞されてゐるやうな節があつたのである。

すなはち、何氣なく振返つてみると、五六人の者が、十間ばかりの後からついて來てゐたが、此方が振返つたと感付くや、人家の軒下へ入つてしまつた。

さうかと思ふと、辻へ來た時、左右を見ると、どつちの小路にも七八人の男が立つてゐて、小源太たちを待受けてゐるやうな様子を見せた。

さうして佐久間町へ來た時、今のやうに、不意に爺燈で照らされたのであつた。

呼笛となると、その間、幾度鳴つたか知れなかつた。

恰も、その筋の者が、捕方が、大勢で、小源太たちを遠巻にし、小源太たちの後をつけ、その落着く先を見届けようとしてゐるかのやうであつた。

『三木君、もし彼等が捕方だとすると困つたものだな。……われ／＼の仕事も、こゝ數日のうちには

目鼻がつく……その端緒にとりかゝることが出來るといふ所まで來てゐて、邪魔されるのだからな』

『さうですとも』

『捕方か、それとも他の何者か』

『ひとつ、わたくし、ぐるりと廻つて確めてきませうか』

『成程、君の早足なら出來るだらう。おねがひしよう』

『よろしうございます』

かう云つた時には、もう三木頼母の姿は見えなくなつてゐた。

品川の海の潮には、星が姿をうつしてまばたいてゐるし、鷗らしい鳥の群が舞上がつたり舞下りたりしてゐるし、潮くさい微風が吹いて來たりした。

小源太と同志の浪人たちは黙々と歩いて行つた。

その時、風のやうに横丁から走つて來た者があつたが、小源太の側へ寄ると、

『いけません……捕方どもです……それも相當用意をしてゐて……刺殿などといふ道具まで持つてゐて……しかも人数は三四十人、いや、もつともつかもありません……グルリと、この界限をとりまいてゐます』

といつた。頼母であつた。

『苦勞……さて何うしたものだ』

と小源太は考へ込んだが、

『やむを得ない、かうなつたら一か八か大膽にやらう』

それから、

『諸君、集まりたまへ！』

と、後れてついて来た同志たちへ呼びかけた。

同志の浪人たちは集まつて来た。

小源太は、

『諸君！』

と、この男一流の傍若無人の、男性的の聲を出して云つた。

『諸君！ 諸君も、もう大概かんづいてゐることと思ふが、われ／＼は、頑冥不靈の、鎖國主義の、退嬰主義の、徳川幕府の犬どもに取巻かれてゐる！ われ／＼は捕へられるかもしれない！ しかし捕へられてはいけない！……諸君！ 僕は諸君たちに、僕の隠家を教へた！……それで、幕府の犬どもに襲はれて戦つた際にわれ／＼はバラ／＼となつて遁れよう！……一緒に集まつてゐては目立つて不利だからな！……しかし、バラ／＼になつて、めい／＼勝手の所へ行つて潜んでも、三日の中には、

僕の隠家へ歸つて来てくれたまへ！……次に、さうはいつでも、これから始まる攻防戦で、われ／＼は死ぬかもしれない！……死ぬ身に遠慮はない！……日頃抑壓されてゐた鬱忿を思ふさま爆發させよう！……我輩から始める！……ヨイスつさエイさつさ！』

と突然、深夜の静かな秋の空気を顛はせて、數町も響きさうな大聲で囁しだした。

『ヨイスつさエイさつさ！ 南洋ひろいぜ、島は無數で、錫や石油や資源は無限ちや、ヨイスつさエイさつさ！ 南洋呼んでる俺等と呼んでる、行かうぜ、あの地へ、俺等は捨石、捨石結構、ソレ行け、船出ぢや！』

手を拍ち、足踏みをし、體を斜にし、この武骨の男は、歌とも阿保陀羅經ともつかないものをうたひ、踊りだしたのであつた。

すると、一人の浪人が、

『あいやお立合ひ、遠慮はいらないズツとお寄り、今抜く拙者の刀なまくらながら、鼻の膏をつける  
と名刀となり、ズンと斬れる！ アメリカ、イギリスあたりの赤髯どもの首なら一揮に十、二十たゝつ切つてみせる！ あつちにもあるこつちにもあるといふ刀とは異ふ。……嘘と思はゞ驗してみせる！ コレ、その邊にウロ／＼してゐる幕府の犬ども、遠慮はいらないズツと寄りな、驗してみせる！ エーイツ』

といふ聲と共に、この蝦蟇の膏賣り、香具師の物真似をした男は、矢庭に腰の刀を抜いた。

『ヨイさつさエイさつさ!』

するともう一人の浪人が、

『今年の花は去年の花の似く好し、去年の人は今年に到りて老ゆ』  
と、悲壯の聲で詩を吟じ出した。

『ヨイさつさエイさつさ』

すると又一人が……といふやうに、十二人のあばれ者どもは破目を外して歌ひだし踊り出した。

しかし是は、自暴自棄からの、振舞ひではなくて、大膽ながら思慮緻密の小源太の、

(捕方共へ、われ々の勇氣を見せつけ、彼等の出鼻を挫いてやらう)

といふ思惑から出た行動なのであつた。

天狗か通り魔のやうなこの一團は、かうして悠々と進んだ。

この一團が、明覚行者たちの籠もつてゐる空家の附近に來たとき、その傍若無人ぶりは最高潮に達した。

蹴り、うたひ、刎ね、キリ／＼舞ひをし、六尺棒や白刃や十手を振廻し、ほとんど狂人の群か、妖怪の夜行のやうな有様をあらはした。

『ヨイさつさエイさつさ』

『お前たち／＼蚊張のそと……』

『蚊に食はれ……』

『ホイ!』

『何をクヨ／＼川ばた柳……』

『アレサ、コレサ』

『丹波から捕れた荒熊! 熊の膽は萬病にきく! 買はんかな／＼』

『丹波笹山、やまがの猿が……』

『キヤツ／＼』

『花のお江戸で芝居する』

『キヤツ／＼』

『犬もあるけば棒にあたり……』

『くさい物にはふたをする』

『亭主のすきな赤えぼし』

『花より團子……』

——いろは加留多の文句、はやり唄、猿の啼聲まで眞似てハメを外すかと思ふと、或者は軒の看板を外して、數間先きの家の軒下へ置いたり、或者は酔つばらひの眞似をして、人家の雨戸へぶつかつたりした。これは彼等が最近に日本を去つて、海外——南洋へでも行くらしい計畫を立てゝゐるので、それで、徳川幕府治下の江戸など眼中になく、その結果さうも狼藉するのであるらしかつたが、他方彼等は一藝に達した武士でありながら、これも徳川幕府封建制度の犠牲となつて——即ち、一旦浪人となると殆ど永久に仕官することが出来ず、その浪人は危険分子として迫害され衣食にさへ窮する——といふ位置に置かれて今日まで来た憤りを、この機會に晴さうとしての狂態でもあつた。さて、かうしてこの一團は、明覺行者や、世の廢人たちの籠つてゐる空家の側まで来た。するとその時、その空家の横手の露路から、人影が走り出たが、矢庭に空家へ驅込まうとした。途端に空家の戸が内から開いて人影が往來へ出た。

『静子媼か！』

『お、明覺行者殿オーツ』

走つて来たのは静子媼であり、空家からあらはれたのは明覺行者であつた。

『ヤツ、明覺！』

これは、傍若無人の群の先頭に立つてゐた小源太で……

『明覺殿オーツ、その御幣を！』

むしやぶりつく媼から身を反らした時には、明覺は、御幣を、高く頭上に捧げたらしく、その白木綿が、闇に白く、木蓮の花の咲いたやうに見えた。

『媼よ、この御幣まだ返されぬよ……そなたの心境清まらぬ中はな！』

『法螺貝渡せ！』

『まだそなた解らぬか！……法螺貝に代つて、秘密を解く鍵を渡したと云つたわしの言葉が！』

『行者アーツ』

とその瞬間、小源太が斬込んだ。

## 七 花 八 裂

その一髪の間、静子媼が走りだして来た同じ露路から、鴨下庄三郎が走りだして来たが、物も云はず、行者と小源太との間へ身を投じた。

太刀音！

火花！

——さうして、もう次の瞬間には、二人の武士は、互ひの刀を正眼に付け、睨みあつてゐた。

『鴨下君か！』

『本庄！』

『さうか！……ようし！……もう不可ない！……二人ばかりの時なら、今では寧ろ朋友だが、明覚行者を中へ挟んでは、敵だ！……さうか、ようし、飽迄も明覚を葦山へ連れて行くといふのだな！……俺は邪魔する！ 俺はやらぬ！……知己、鳥居甲斐守様へお盡しする悲しい武士の、この小源太の、やむにやまれぬ念願だと思つてくれ！……遠慮無く斬るゾーッ』

『……………』

しかし庄三郎は、それには答へず、眼では小源太を睨みながら、聲は背後の明覚行者へかへた。

『そこにおゐでなされるゝが明覚殿にございまするか、私事は、伊豆葦山の代官江川太郎左衛門の門弟鴨下庄三郎と申す者、師匠事、大砲鑄造を心掛け、大反射爐を造らうといはしましたが、反射爐をつくるには、耐熱煉瓦を製造する必要あり、耐熱煉瓦を造るには、その材料の良土を發見いたさねばならず、その良土の有場所、日本國中の山々谷々を跋渉なさるゝ明覚行者こそぞ存知と思ひ、師匠の命により、私こと數ヶ月前より、あなた様の行衛を求め、富士より落合、毛間等の部落へ参り、千辛萬苦いたしました、尙、明覚様、江戸へ参られたと承はり、その後を追ひ、江戸へ参り、今日までお行衛さがしてをりました、……大砲鑄造は、刻下の日本の海防に執りましては必須、缺くべ

からざる事項、この儀おぼしめし下され、願はくばこの庄三郎共々、葦山へお越し下され、師匠江川太郎左衛門に……』

——この時、露路から、往來の行手から、又、後方から、ムラ／＼と大勢の人影があらはれたが、それと共に、星月夜の暗い世界が、ひらめかす龕燈の光、振り照らす御用提燈の光で、明るくなり、

『御用！』

『捕れ！』

の聲々によつて、今までの喧騒が、十倍にもなつた。

怒號、悲鳴、喚聲……力、十手、棒の打合ふ音で、喧騒は殺伐の氣を加へ、越中島の通りは修羅の巷と一變した。

巷と一變した。

大勢の捕方が襲ひ出たのであつた。

その捕方を相手として、小源太の同志の浪人たちの、縦横無盡の戦ひぶりといふものは！

五、六人の捕方が一人の浪人をおつとり圍んだが、それに向かつてその浪人は、持つてゐた棒をひらめかした。と、鹿島流の棒の妙技でもあらうか、一、三人の捕方はさながらはじかれた豆のやうに岸から海へころがり落ち、捕方を難落した浪人は、

こゝまでおいで甘酒進上……



と、唄ひすてると露路へ駆込んだ。

……その後を追つて遁すまいと捕方共の追はうとするを、  
来たか長さん待つてたホイ……

と、よしこのの囃を唄つたかと思ふと、これも棒を持つてゐたもう一人の浪人が、その捕方の行手を遮り、棒を横へ流れるやうに振るや、寶山流の振杖のこれも妙技か、割りぬかれてある棒の中から鎖があらはれ、ガラ／＼といふ音と共に、三四人の捕方を束のやうにその鎖で捲き集め……  
エツサツサー、さゝ豆ホイ

と、歌ひ、浪人がグーツと、振杖を引くと、鎖がほぐれたらしく、束になつてゐた捕方どもは、地に倒れたり、とんでもない方へスツ飛んで行つたり、人家の門口へぶつかつたり、さうして或者は地上をころげ廻つたり、或者は、苦痛にたへられないで、自分から海の中へ飛込んだりした。それは杖を引かれた時に、自分たちをガンジガラミにしてゐた鎖によつて、腕や足や、首の骨やが、バラ／＼に折られ挫かれた爲であつた。

碓氷峠の権現様よ……

と、さういふ事をした浪人は、平然と、悠々と、追分をうたつて振杖をかついで、越中島の通りを  
××の方へ走つて身をくらませて了つた。

かういふ戦ひの渦中にありながら、一人の浪人は、米相場の賣つた買つたの眞似でもしてゐるのか片手を宙へ上げて、掌をヒラ／＼と振つてゐた。しかしその手が、電光のやうに前方へ突出される毎に、捕方が、一人々々仆れ、口から血を吐いたり、胸から血を吹いたりした。唐手の名人の浪人が、その妙技を揮つてゐるのであつた。

一人の捕方が、胸から血を吹きながら、よろけて、例の空家の雨戸へ仆れかゝり、雨戸を外した。するとその雨戸の外れたところから六七人の男女が悲鳴をあげながら飛出して來た。乞食や夜鷹や小泥棒どもで、破戒坊主は一本の傘を大事さうにかゝへ、心中の仕損ひの男女は手を引合つて、往來を左右へ逃げた。

眼のくらんだ捕方どもはそれをも浪人の一味と見たらしく『御用々々！』と叫びながら追つかけた。  
早足の三木頼母ばかりは、逃げようとも戦はうともしないで、一軒の家の軒下の暗い所に佇んで、一所を見詰めてゐた。

彼の視線の先に明覺行者がゐた。

頼母は、自分にとつては早足や遠あての師匠である明覺行者の出現に、當惑してゐるのであつた。  
(出て行つて挨拶しなければならぬ！ しかし、この混乱！ それに自分も捕方をまいて遁れなければならぬ！……どうしたらよからう？)

—それで當惑してゐるのであつた。

しかし、すぐに、さういふ彼の眼の前で、奇蹟的行爲が行はれた。

明覺行者が、高く頭上にさゝげてゐた御幣を、銚のやうに海へ投込み、つゞいて自分も、その後を追ひ、巨大な蛾でも舞立つかのやうに海へ飛んだことである。

その後を龕燈の光が追つた。行者は、御幣の上に乗つてゐる。

龕燈の光の中に見える行者の姿は、つゞましかつた。

巨大な蛾は——行者は、今翺を閉ぢ、兩足をちんまりと揃へ、白い一本の雌蕊のやうに見える御幣の上へ、一片の羽根のやうに軽く乗り、少し腰をかゞめ、大事さうに法螺貝を小脇に抱き、こつちへ背を向けてゐた。

でも、それは、静止してゐるのではなくて、沖の方へ向かつて、潮を分け、駈つてゐるのであつた。行者の顔が、蒼い龕燈の光を浴びて此方へ振返り、

『媼よ』

といつた。

『媼よ、わしは江戸へおさらばするのぢや。……江戸での修行濟んだからう。……つまり江戸を卒業したのぢや。……といつて今年にはもう富士へは歸らない。……わしは別の所へ行くのぢや。……そ

こで、わしは、絶壁へ道をつけるのぢや。……永年その仕事にかゝつてゐたが、今年には完成しさうぢや。……媼よ、さやうなら！』

静子媼はこの時行者を追つて岸まで驅けて來てゐた。

さうして其處で、行く船を呼ぶ俊寛かのやうに、瘦せた兩腕を高く上げ、袂を、沖からの潮風にひるがへし、足を爪立て、

『行者殿オ——ッ』

と呼んだ。

『御幣を返せ！ 法螺貝下されヨ——ッ』

しかし行者は、もう龕燈の光の届かない遙の海上を、今は黒い點となつて、次第に小さくなつて行つた。

これは奇蹟であらうか？

そんなことは無い。勢ひつけて投込んだ御幣の上へ、永年の山での修行で、毛のやうに軽くなつてゐる體を停まらせ、腰で巧みに棍をとり、足で速力を促進したなら、あのスキーヤーが、雪のゲレンデを迂るやうに、海上を滑つてゆくことが出来ようではないか。……

行者の姿はやがて見えなくなつた。

その時、その行者とは反對に、月島の方から、一隻の小船が、矢のやうな速さで、まだ捕方と浪人たちの格闘してゐる越中島の方へ漕いで來るのが見えた。

さうしてその小船が、越中島の岸へ着いた時、一人の武士が、岸から夫れへ飛下りた。

小源太であつた。

つゞいて飛下りたのは庄三郎で、

『卑怯！ 小源太！ 逃げるか！』

『ワツハツハツ、逃げはせぬよ、家へ歸るのちや』

云ふと小源太は、持つてゐた刀を船底へ投出し、

『鴨下君、行者は消えた。……明覺の居ない僕たちは……明覺行者を中へ挟まない僕たち二人は、友達達の咎だ！……僕の家へ行かう、見せるものがある』

それから船夫たちに聲をかけた。

『ご苦勞、いゝ所へ來てくれた』

『や——、貴様たちは？』

と仰天して叫ぶ庄三郎へ、數人の船夫たちは笑聲をあびせ、

『鴨下さん、又逢ひましたねえ』

それは刑部者たちであつた。

小源太たちを乗せた小船が漕ぎだされ、月島の蔭へかくれた頃には、もう越中島の通りでの、捕方と浪人たちとの戦ひも終りをつけてゐた。

壓迫されながら生きるために、浪人たちは、これ迄、いかに體を鍛錬し、武術を錬磨し、鬪争の駆引、逃亡の方法、さうして江戸の地理の研究をしてゐたことか！ この夜それらを役立て、幕吏や捕方どもを、翻弄し、擲擧し、叩斬り、投仆し、さうして八方に別れて逃げ、味方を助け、敵を牽制してバラ／＼と、逃げおはせて了つたのである。

一時に、潮のわくやうに湧き起つた混乱と喧騒とは、又一時に、潮の引くやうに引いて、越中島の通りは、ひっそりとなり、往來に落散つてゐる捕物道具や人間の腕やを、燃えのこりの提灯の灯が照らしてゐるばかりであつた。

しかし、さういふ寂しいこの通りの海の縁に、二人の女がゐた。

一人は静子嬢であり、もう一人は、やつとこの時こゝへ驅付けて來たお鳥であつた。

一人は神がゝりになつてゐる母、一人は行者さがして夢中になつてゐる男、その二人の速い足の後を追つて、お鳥は走つたものゝ、いつか二人を見失つて了ひ、あつちの露路こつちの横道とさがしあはるいたあげく、やうやく此處まで來てみれば、母一人が、海の岸に立つて、沖の方を眺めて、狂氣の

やうに叫んでゐるではないか。

あたりを見れば、御用提燈が燃えてゐる、その側に、折れた刀や十手が落ちてゐる、千切れた袖が落ちてゐる、肘の邊から切りおとされた人間の腕がころがつてゐる。……恐ろしい戦ひが行はれたことが證據立てられてゐる。

母は居る！……心配は無かつた。でも戀人の庄三郎様の姿は見えない！『庄三郎様ア——ッ』

——と、其處で、思はず、聲をしぼつて呼んだのは當然といへよう。然も彼女は、兩手で、今にも海へ飛込まうとする母親をしつかり背後から抱きかゝへながら、今呼んだのであつた。

『庄三郎様ア——ッ』

答へるものは、岸の石垣へ寄せては、舌打ちのやうな音を立てる波の音と、今まで、戸外の亂闘を盗見してゐた往來ばたの家の人々が、雨戸を閉ぢる音ばかりであつた。

(恐ろしい斬合ひがあつたに相違ない)

あたりの光景で、このことは、お鳥に想像された。

(庄三郎様は殺されたのではあるまいか?)

あんな善良な人が、そんな目に逢はれる筈はないとは思ふものゝ、毛間の部落で、濡衣から、沼に

はめられて殺されようと思へしたあのお方である！ そんな目に逢はないと、どうして斷言することが出来よう！

(わたしは何うしよう?)

(どつちみち私はもう二度とふたゝび、あのお方には逢はれないやうな氣がする！)

この不吉の豫感が、彼女の涙を誘ふのであつた。

『庄三郎様ア——ッ』

## 改装工事

越中島の通りで、さういふ捕物の亂闘があつた日から三日経つた日、鴨下庄三郎と本庄小源太とが月島の——越中島とは反対側の一所に立つてゐる二階家の家根にのぼり海の方を見てゐた。

庄三郎の手に持たれてゐるのは外國製の望遠鏡であつた。

鳶が生魚をくはへて来て、猫へサービスでもしさうな、理想的の秋日和で、沖には、大森邊から來たらしい海苔船が動いてゐるし、陸を見れば、明石町の海岸通りを汐留の辨天さんへでも參詣するらしい人の群がうごめいてゐるし、空を見れば、雲といふ雲が、みんな、日光を纏つて、明るく浮動してゐたりして、ほんとうに、氣持のうき／＼する日であつた。

しかるに二人の武士が眼をとめて見てゐる前方の海上には、何んとも變な建築物が一棟立つてゐた。それは月島の岸から海中へ、すつと長く、さうしてすつと廣く突出して建てられてある板張りの建物で、その高さも數十丈あつた。さうして夫れは、採光のために大きな四角の窓が、諸所に開けられてあるのと、波や風に打倒され吹倒されまいための、頑丈なさいへ丸太が、無數に建物の四側面にとりつけられてあるのが特色で、その他には何んの飾りも無く、色彩も施してない、眞に無愛想な又、粗末な建物で、家根なども無雜作に合掌形に作られてあるばかりであつた。

それも比較的最近に建築された建物とみえて、木口の色は白く、まだ雨風によごされてゐなかつた。それで、その建物が、琥珀のやうな色の秋陽に照らされ、その裾の邊を、潮に洗はせながら、海中に立つてゐる姿は、沖を眺望する者にとつては邪魔であつたが、でも、變つた一つの風景として、興味を持つて見ることは出来た。

この建物は、俄ごしらへのドックなのであつて、その建物の中には、巨大な和船が、足場や、引綱や、支への丸太などに圍まれ、さうして無數の船大工や、監督の武士などに圍まれて据ゑられてあるのであつた。

しかし、その船はそこで建造されてゐるのでなく、改装されてゐるのであつた。すなはち、出来上がつてゐる和船を、出来るだけ洋風に改装してゐるのであつた。

さうしてこのドックは、その船の改装が終れば取拂はれる程度のもので、要するに、改装工事中、船を雨や風に曝させまいための板圍ひに過ぎないのであつた。

ところで、そのドックを、家根の上から眺めてゐる庄三郎や小源太の眼には、ドックの外側が見えるばかりで、その内の船も、それが改装されてゐる光景も見えはしなかつた。

たゞし、いくつか開けられてゐる大きな窓から、船の一部や立働いてゐる船大工の姿などは見えた。家根棟にまたがりながら、小源太から貸してもらつた望遠鏡で、庄三郎が熱心に見てゐるのは、その窓らしかつた。

『僕が君に、よく、見せたいとか見てもらひたいとかいつたのは、そのドックなのさ』

と小源太としては、珍しい、どこか狡猾さうな笑ひかたをして云つた。

『まあ熱心に、そのメガネで窓を覗いてゐたまへ、びつくりして、アツといふやうなものを發見するから』

『何んだらう？』

と、庄三郎は、尙、望遠鏡を通してドックの窓を見ながら、

『何を見て僕がびつくりするといふのだ？』

『まあいゝ。……僕からいつてはつまらない。……君自身で發見してびつくりするがいゝ』

『それにしても變だね、君は「僕の仕事を覚えてくれ」といつた筈だが、あのドックは君のものでないことはわかつてゐるし、ドックの中で改装してゐるとかいふ船も、君の所有ではないといふことだから、君の仕事とか事業とかいふ言葉とは合はないではないか』

『いや、それがさうでないことになるのだ。……しかしまあそんなことは、どうでもよいとして、船の改装はなか／＼上手にいつてゐる。……普通の和船を武装して、近海警備の戦艦にしてゐるのだがね、地中海あたりの海賊船——ガリ船といつてゐるやつだが、その形式を採用したり、ヨット形の帆を利用したりして、なか／＼器用にやつてゐるよ。……しかし元が和船なので、黒船のやうに機關を備へて、蒸氣でスクリューを廻轉させて、自動的に船を進行させるといふところまではいつてゐないらしい』

『それにしても、その船は何處の持船で、誰が改装の衝にあつてゐるのかな？』

『勿論幕府の持船なのだ。……改装の衝にあつてゐる人は……』

かう云つて来て、小源太は口を噤み、下の空地を見下ろしたが、

『おや又一人歸つて来たな。……近藤三四郎君らしい。……いゝ男が歸つて来てくれた。……彼は天文を観るのが旨いのだから好都合さ。……それにしても日中ノコ／＼とやつて来るとは大膽すぎるな……幕府の犬ども鵜の目鷹の目で俺たちの行衛をさがしてゐる際に……』

眼の下の空地には近所の子供らしいのが五六人集まつてゐて、枯草や枯木をあつめ、焚火をしてゐて、その煙が、さつきからこゝへまでも昇つて来て、眼を痛くさせてゐたが、その焚火の横を通り、一人の、深い編笠をかむつた武士が、この家へ入つて行つた。

三日前、越中島の通りで捕方どもと戦ひ、たくみに通れた小源太の同志の浪人の一人らしかつた。

『君はガリ船の構造を知つてゐるかね』

と、やゝあつてから小源太が云つた。

『知らない』

『江川先生の門下がそれでは困るな。……ガリ船といふのは、帆と櫂とを二つながら使用して、速い速力で船を進退させる海賊船なのだ……おや又一人歸つて来た。……三木頼母君らしい』

見覚えのある早足の三木頼母がこれも深い編笠で顔をかくし、焚火の側をとほり、この家の軒の下へ入つて行くのが見えた。

『われらの同志はよく約束を守つてくれる。……僕は彼等に、あの三日前の晩、幕府の犬どもに襲はれ、どこへ通れても、三日の中には此處へ来るやうにと云渡したのさ。……約束を守つてよく集まつて来てくれるわい』

と、小源太は満足さうに云つて、これも庄三郎と並び、家根棟にまたがつてゐる體をリズムカルに

揺り、

『いやア、それにあばれ者の刑部者どもが、見給へ、さつきから、重い權をあやつつて、船を漕ぎまはつてゐること』

かう云つて、いよく満足さうにドツクの左手の海上を、數隻の小船が漕ぎまはつてゐるのへ願をしやくり、

『三日前のあの晩、君を船でこの家へ招待した時、船の中で、僕、君に説明したつけね。——僕の事業を手傳はせるため富士の裾野の刑部部落の英雄豪傑どもを、江戸へ呼びよせ、僕の隠家や、隠家のまはりの借家へ住まはせてゐるつて……僕は其奴等に命令を下したことさ。「何をする必要もない、毎日々々、重い權を使つて船を漕ぐことを勉強しろ」とね……あいつら、よく勉強してくれる……あの鹽梅だとガリ船だつて漕げさうだ。アツハツハツ……ところでドツクで改装中の船だが、ガリ船の型を加味して、帆と權とを併用するやうになつてゐるので、風のある時には帆を使つてはしらせることが出来るし、風の落ちた時には權を使つてはしらせることが出来るつてわけさ。……だからよ、南洋あたりへ行くにはもつてこいの船さ。アツハツハツ……そこで僕はあの船へ、南洋丸と命名したのさ』

『君の所有でもない船へ、君が命名するとは可笑しいぢやアないか』

『天下の重器、豈幕府の私有を許さんやだ、アツハツハツ』

東を望めば、安房上總の山々が青貝のやうに、霧と潮煙とを纏つて浮出てゐ、その方面へ向かつて幾隻かの帆船が、白帆を陽の光の加減で薄墨色に染めて駛つてゐた。

庄三郎は小源太と話しながら、眼では、望遠鏡を通して、熱心にドツクの窓を見てゐた。

その窓へは、仕事のひま／＼に海を見る船大工や、監督の合間々々にそとを見る武士の顔などが覗き、それが、メガネをあて、見てゐる庄三郎の眼に大映しされて、その皺さへ認められさうに鮮かにうかゞはれた。

『ところでね、君』

と小源太は、又、狡猾さうな笑顔をしながら、

『もう改装は今日で完成するのだ……もう甲板にはご自慢の大砲も備付けてあるし、羅針盤も取付けであるし、艦長室には航海圖も貼られたし、船槽には食料も飲料水も運びこまれてあるといふ有様なのだ。僕は、かういふ船にお目にかゝらうとして長らくの間、下田や長崎へ出向いたり、いろ／＼の船大工の棟梁と交際したりしたものだ』

庄三郎は、さう能辯に喋舌る小源太へは返辭をしないで、ドツクの窓へ望遠鏡を向けてゐたが、

『おや！……はてな？』

と、思はず大聲で呟いた。

小源太は喋舌りつゞけた。

『ところで君は、南洋がどれほど植物、動物、礦物等の天産物が豊で、さうしてあの豊かな天産物にあがれて世界中の奴等がどれほど南洋で策動したか、さうして日本人が、これ迄どれほどその南洋で勢力を張つたか、さうして現在は誰がその主人であるか、さうして、しかし將來は、誰が、どこの國が、その南洋の主人公にならなければいけないかといふことに就て、考へたことがあるかね?』

『さあ』

と庄三郎はすこし當惑しながら、

『多少は考へた。……しかし僕はそんな遠くのことより、もつと身近い、日本の海防といふことをより一層考へたね。……』

『それもよい。……まして江川先生の門下の君としては、それが當然でもあらう。しかし僕としては、だね、守るといふことは攻めることではなければいけない、進出といふことではなければいけないと云ひたいね』

小源太は、どうやら自分の云つてゐる言葉に、自分が陶醉してゐるかのやうに、家根棟に跨がらせてゐる兩足をバタ／＼させて、家根瓦を叩いた。

『おや!……はてな?……しかし! まさか!』

と又庄三郎は意外さうに大聲で呟き、望遠鏡を窓の方へ延ばすやうにして、夢中で見入つた。

それは、その窓へ三人ほどの武士の顔があらはれたが、その真中の一人の武士の顔が、江川太郎左衛門先生の顔に相違ないからであつた。

『何うした?』

と小源太が訊いた。

『いや……ドツクの窓へ……意外のお方の顔が……』

『江川先生の顔であらう!』

『ナニ?』

と庄三郎は、望遠鏡から眼を放し、小源太の顔を睨むやうに見、

『では……』

『ワツハツハツ……だから僕はさつきから、びつくりしてアツといふやうなものを發見すると君に云つたではないか』

『しかし……それにしても……江川先生が……あのやうなところに……』

『何んの不思議があるものか、幕府から依頼され、數ヶ月前から、江川殿が、あの南洋丸の改装工事



を主宰してをられるのだ』

『……………』

『江川流に改装し、江川式の大砲を備付け……………』

庄三郎は急いで再び望遠鏡へ眼をあて、窓の方へさしむけた。

あく迄も大きい眼、あく迄も大きい鼻、あく迄も大きい口の、英雄らしい江川先生の顔は、尙、陽の光の明るくあたつてゐるドツクの窓から、

『お、鴨下、そこに居たか』

と云つてゞもゐるかのやうに、此方を見てゐた。

『先生エーッ』

と庄三郎は叫ぼうとしたが、聲は口の中で封じられた。

こゝから呼んでも聲がとゞかないと思つたからではなく、

（俺は先生からの使命を果してゐない、俺は明覚行者をさがし出して、まだ葦山へ連れてゆかない）  
どいふ自責の心が彼の聲を殺したのであつた。

明覚行者！——おゝその明覚行者は、三日前の晩に、このつい對岸の越中島の往來で見かけた。でもその行動は？ 巨大な御幣に乗つて海を渡つて闇の沖へ行つてしまつた！ その有様を、彼は、小

源太と白刃をまじへながら、亂闘の巷に居りながら、たしかに見た！ 信じられない幻影だと思ひながら、でも、たしかに見た！……さうしてたしかに取逃がしてしまつた！

その時、行者が、静子嬢へ、

——わしはもう江戸を立去る、しかし富士へも今年には行かない、別の所へ行つて、絶壁へ道をつけるのだ——

といふ意味のことをいつた聲も聞いた。

さうして、あの夜以來、この小源太の家へ、監禁同様にされながら、心にかけてゐたのは『別の所へ行つて』といふその言葉の意味であつた。

（別の所とは何處だらう？）

（何處であらうと、そこをさがし出し、明覚行者と逢ひ、あくまでも葦山へおつれしなければ……………）

（早くこゝを出て、その別の所へ行かなければ……………）

かうして三日経つた今日、今、眼の前に江川先生のお顔を見たのである。

（先生エーッ）

驅付けて行つて、お逢ひして、事情をお話してお詫びしようか？

（そんなことは出来ない！、大切な使命を果さないさきにお逢ひして、お詫びするなどと、そんなこ

とは出来ない！……意氣地のない奴、頼甲斐のない奴——勿論、人格者の先生、聲色に出して非難などなさるまいが、お心ではきつと然うおぼしめすに相違ない！……男として、武士として、先生の門下として、どうしてそんな非難に堪へられよう)

苦しい庄三郎の心持が手の顫へとなつてあらはれ、その手にさゝへられてゐる望遠鏡がふるへた。

さういふ庄三郎の感情など勘定に入れないかして、小源太は、

『鴨下君、一口に南洋といつてもな、島は一つや二つではないのだ、七千もあるのだ、おゝ島の数は七千もあるのだ！ 何んと素晴らしいではないか！……僕は長崎者だから南洋のことはよく知つてゐる！……七千もある島々に、おゝどんなに珍奇、どんなに尊い、どんなに人生に有益な、さうしてどんなに高價な物資が、どんなに豊富にあることか！……とても言葉では云ひあらはせないなア……』と歌ふやうに、あこがれるやうにいひ、又も、足で家根瓦を叩いた。

なほ小源太はしやべりつゞけた。

『先づ大きい島からいへば、ニューギニア、ボルネオ、ジャワ、ヒリツピン、セレベス、ビスマルク島、ソロモン島、……あゝ逆も云ひきれない。……それらの島國から出る物産といへば、石油、ゴム、錫、黄金、キニーネ、……ポークサイト、……タングステン。……コブラ……麻、石炭、煙草、あゝ逆も云ひ切れない。……ところでそれらの島國を占領して、それらの物産を自由にしてゐる國は何處

何處かといへば、オランダ、西班牙、英國、その他いづれも毛唐どもなのだ……ところで日本の人間でそれらの島國に渡つて雄飛した者があるかといふに有るねえ。……先づ大名では内藤如安、高山右近太夫がある。……貿易商としては、御朱印船の連中、魚屋助右衛門、末次一家、角倉一家、末吉孫左衛門、龜井武藏守、茨木屋又左衛門、龜井武藏守家中、鍋島直茂家中、加藤清正家中、荒木宗太郎その他無数にある。……おゝ、その御朱印船の盛んだつた頃の、南洋における日本の勢力といふものは！ 島々には日本町がある。港々には日本の商館が立つてゐる。春秋二季の貿易風に乗つて往來した船の数は數百隻！ 南洋全體に擴がつて住居してゐた日本人の数は數千人にも及んだらうか！……その日本人の堂々たる態度といふものは！ 高山右近太夫などは、槍を立て、代馬を引かせ、大名行列をつくり、ルソンの市中をねり歩き、ルソン大守をして畏敬せしめたものよ！……ところが寛永の鎖國となるや……』

この時、家根にかけてある梯子を登り、一人の武士が、家根から半身をあらはし、

『本庄さん、そろ／＼家根から下りなければいけません』

と云つた。

天文を観るに旨いと云はれてゐる近藤三四郎といふ武士であつた。

『何故かね、近藤君』

『しけが来るからです』

『しけが？　こんな好い日和に？』

『しけが来ます。……それも尋常のしけではありません。七日間もつゞくしけです。……又人家が吹倒され船が轉覆することです。』

そこへもう一人梯子をのぼつて来る者があつたが、三四郎の横から顔をのぞかせ、

『本庄さん、用心しなければいけません』

と云つた、三木頼母であつた。

『變な奴が幾人も、この島をうろついてゐます。幕府の犬のやうです。先夜の奴らしいです』

『さうか！』

といふと小源太は立上がった。

『南洋丸の改装は完成した！　しけが来る！　幕府の犬どもがこの家を取巻いた！……ようし！　今夜決行だ！』

小源太は梯子の方へ向かつて歩いた。

庄三郎もそれについて梯子の方へ歩いたが、もう一度望遠鏡をドックの方へ向けて見た。

もう窓には恩師の顔は無く、窓ばかりが、ドック内の雄大な改装船を連想させるやうに、洞然と開

きつゝゐた。

### 心のふる里へ

この夜の小源太の家は大變な混亂であつた。

小源太をはじめとし、十一人の海防浪士や、その他の浪人や破落戸らしい男たちや、十數人の刑部

者や、船頭、水夫、鳶ノ者、船大工、鍛冶屋らしい男たちが總勢五十人近くも集まつて来て、めいめ

い身拵へをやりながら、茶碗酒を飲んだり、刀、鐵砲、かけや、鋸、槍などの手入れをしたりした。

小源太は籠手脛當をし、腹巻を着けた上へ羅紗の陣羽織をはをり、火事場頭刀をかむつた。三木頼

母も腹巻はつけなかつたが籠手と脛當とはつけた。その頼母は絶えず戶外へ飛出して行き、飛出して

行つたかと思ふと飛込んで来て、何か小源太へ囁いた。思ふに彼は、その早足を活用して、島中を驅

廻り、捕方が襲つて来るかどうかを探り、それを小源太へ報告してゐるやうであつた。

さうかと思ふと、船大工らしい男や、鳶者らしい男やが、ドックのある方へ出て行つたり、そつち

から歸つてきたりして、

『ドックはミシ／＼きしんでゐます』『お侍さんたちも大工たちもみんな引上げて番の者が幾人か残つてゐるだけです』

などと小源太へ報告したりした。

部屋々々の境の襖障子を取拂つた、だゝつびろいこの家の内部は、だからさういふ出たり入つたりする人、身仕度をする人などで騒々しくなければならぬのに、事實は反對で、しめやかで秩序があつて、雰圍氣は緊張してゐた。それは、この人々が、これから決行することに對して眞剣である證據であつて、決して一時の思付きや、お祭さわぎ的行爲でないことを示してゐた。

戸外はすさまじい暴風暴雨で、岸へぶつかる劇しい波の音、家々の壁や木立にあたる風雨の音が、破壊の交響樂を奏してゐた。

失火をおもんばかつて、行燈はともさず、弓張提燈に火を入れ、それを柱にかけたため、屋内はただ朦朧と明るいばかりであつたが、その光に呆然とした顔を晒らし、庄三郎は一本の柱に背をもたせ、人々の動作を眺めてゐた。

彼には、小源太たちのこの一團が、これから何を行ふかは大概見當がついてゐた。

それは、今日の晝、家根の上で小源太が、おしやべりをつゞけてゐた間に洩らした言葉や、夜となつた今、いろ／＼の人間が集まつて來ていろ／＼のことを云つたり動作したりしてゐる間に洩らす言葉によつて、推察することが出来るからであつた。

(南洋丸を奪つて、南洋へ行くらしし)

これであつた。

——南洋へ行くはいゝ！ しかし日本國內の秩序の總本家である徳川幕府の官船であり、恩師江川先生の改装になる船を奪ふとは何事であるか！

不届な！ 阻止しなければいけない！

——これが本心であつた！ しかし、この連中の海外發展的精神の率直な表現たる潑刺たる行動言語にぶつかつては、何んとも今では阻止しようの無いやうな氣がした、さういふ彼の側へ小源太が近寄つて來た。

「鴨下」

と小源太は云つた。

その聲は眞面目で親みに充ちてゐ、率直でありながら犯しがたい力と威嚴とを含んでゐた。

『いよくお別れだ。これ迄君とは或時には敵となり或時には朋友となり、戦つたかと思ふと手を握りあつたりして、變な仲であつたが、その君とも今夜かぎりお別れだ。……もう君はたいがい感付いてゐることゝ思ふが、僕と僕の同志とは——こゝに居る連中は全部僕の同志なのだ。いやこのほかにも澤山の同志がゐて、長崎その他で僕の行くのを待つてゐる——その同志たちと、今夜これからあのドックの内の南洋丸を奪つて、俺にとつては心のふる里……日本にとつては同血同族の南洋の或島へ

渡るのだ。その島にも同志がゐて久しい前から連絡がとつてあるのだ。ではその島へ渡つて何をするのかといふに、それは今はハッキリとはいへない。しかし是だけはいへる。それは、日本民族の血の中には世界を一丸として、一軒の家のやうな親しいものにしたといふ——朝道的にいへば世界征服、正道的にいへば神武天皇様が大和の橿原で御位に即かせられた御時、宣まはせられた八紘一宇の大御心の具象化！これだ！この精神は、日本人の血の中に、鬱勃と沸つてゐるのだ。その現はれは神代においては素戔嗚尊様、月讀尊様の大海原御支配、神功皇后様の三韓征伐、八幡船の雄飛、豊太閤の大陸政策などだ。……さて日本は八紘をして一字と爲すといふ壯舉を企てるとする。まづ身に近い亞細亞から手をつけなければいけない。まづ支那をして日本の大理想に参加させなければいけない。支那人の中に、頑冥不靈の徒があつて、日本の眞意を曲解したらその一黨に對しては大鐵槌を加へるさ。……つゞいて南洋だ……」

この時、門口から、又も三木頼母が走込んで来たが、小源太へ近寄ると、

「幕府の犬ども、いよく四方からこの家へ……」

「取詰めて来たか」

「さやう」

「充分引付けて、後は一舉に、アツハツハツ、門出の血祭！家諸共だ！」

この時、數人の刑部者が走込んで来たが、

「ドツクへも、もうすつかり仕掛けを済ましてしまひました」

「苦勞。……鴨下君！」

と小源太は、言葉せはしくいつた。

「いよくお別れの時期が迫つた……幕府の犬どもが僕たちを捕りに来たといふ。……然し、鴨下君安心してくれ。君の一身は安全に僕たちが護つて、對岸越中島へお渡しする。刑部の豪傑が、船で君を對岸へ渡すことになつてゐるのだ。……ところで南洋の話だが、世界征服を行ふには、是非とも南洋の寶庫を手に入れなければなア。……そいつを手に入れるには、……手に入れるのは幾代かの後の我等の子孫だらうが……現代の我等は先づ彼地へ住みついて、そこで死んでその土、土臺石、さうだ、骨を以つて土臺石とする必要があるのだ」

小源太は、一方では大事を決行しようとしてゐ、他方では逼つて来た捕方どもを防がなければいけないといふ、キハドイ瀬戸ぎはに立ちながらも、自分の意志を、敵となり味方となり艱難を共に味はつたために、却つて人間の本性がわかり、將來有望の好青年と睨んだ鴨下庄三郎に、知つてもらはう知らせないではおかないといふかのやうに、尙熱心にいひつゞけた。

「僕等は武装してゐる！では誰と戦ふのだ？南洋の島の人々とか！さうではない、その島國を

占領し、島人——我等と同じ東洋人を搾つてゐる毛唐共と戦ふのだ！……さうして僕たちは、島人の生活の中へ入つてゆくのだ。滲透してゆくのだ。彼等と一緒に生活し、彼等と一緒に喜怒哀樂し、彼等と一緒に生き、さうして彼等と一緒に死ぬのだ。……さうして、さうやつて生活してゐる間に、彼等を覺醒させてやるのだ！ 東洋人としてなす。……覺醒させる！ さうだ！ これがわれわれ日本民族の仕事なのだ！ 覺醒から解放へ！ こいつだ！ 全東洋民族を東洋人として覺醒させ、毛唐から解放し、東洋人の東洋とし、東洋人だけで新しい秩序を作り、東洋人だけで先づもつて共榮共存するのだ！……しかしこれが終局ではない！ それから全世界の人類へ、至公至平圓滿具足の生活をさせる新秩序を作りあげるのだ！……それを爲しとげるのが日本人だ！……さて世界は、地球は、そこではじめて眞に平和となる！……それから先は？ 星の世界、火星その他の星の世界への交渉となるのだ！……宇宙の新秩序建設！……これを爲しとげるのが眞に僕たち日本民族の事業なのだ！……お、鴨下君笑つてくれるな！ 大風呂敷だと輕蔑してくるな！……併し……』

この時、

『來たぞ！』

『犬共が！』

『表からも裏からも！』

と、ひそめた聲で、屋内にゐた人々が叫び出した。

途端に家の門口や裏口から、大勢の者のこみ入らうとする物音や『御用！』と叫ぶ聲や、それを食ひとめてゐる浪人たちの聲や音やが、戸外の暴風雨の音をつらぬいて聞えて來た。

『方々！』

と小源太は云つた。

『では、いよいよ手筈どほりに！……』

その聲に應じて幾人かの刑部者が疊を上げ床板を外した。

抜穴が出來てゐた。

人々は、しづかに、一人々々、順を追つてその穴へくゞり入つた。

それと同時に、表の戸や裏の戸を閉め、門や錠を下す音がきこえ、今まで其處を固めてゐたらしい浪人者たちが、足音しづかに引返して來て、やはり床下へくゞり入つた。

『鴨下君、僕たちも行かう』

床下へ入る小源太につゞいて庄三郎も床下へ入つた。

急ごしらへの地下道は這つて進まなければならなかつた。それは地を數尺の深さに掘下げ、それを數十間延長し、板だの椿だの菰だのを以つてその上を蔽ひ、更にその上へ土や雜草をかぶせたものら

しく、月島のやうな寂しい人通りのない所へ作らせたため、人目にかゝらなかつたといふやうな、さういふ粗末なものであつた。

地下道を這つて通りぬけ、地上へ出たところに大藪があり小丘のやうに盛りあがつてゐた。

その藪陰に小源太たちは佇み、吹き荒れ降りすさぶ風雨を避けながら話した。

「……それにしても、江川殿改装の船を奪ふといふこと、鴨下君としては不愉快に思ふかもしれぬが……」

と小源太は、いよ／＼眞面目な聲で云つた。

「僕達の南洋行きには夫れ以外に手が無いのでなア。……それに、江川殿改装の船を奪つたのは僕たちの南洋進出のためだとおき／＼になつたら、江川殿にもお怒りにならずに或ひは却つておよろこび下さるかもしれないと思ふしなア。……いや、その代り鴨下君、君へも江川先生へも僕はよい置土産をしようと思ふのだ。……それは明覚行者の行衛についてだが……三木君、君から……」

すると、一緒に地下道を抜け、こゝへ来て、小源太の側に引添つてゐた三木頼母が、

「鴨下さん、三日前の晩、越中島の往來での亂闘の際、明覚行者が云ひましたね、江戸から去る、今年には富士へはもう行かない、別の所へ行つて絶壁へ道をつけるのだと……その別の所とは、下田の在、天城山の麓の梨本村のことです。……それは行者がずつと以前からそこへ道をつけようとして苦心し

てをられ……そこへ私が行きあはせ……さういふことがあつた。……だから……」

この時、轟然と、爆發の音が、今ぬけ出して来た家の方から聞え、その方角から火の手があがり、御用提灯が宙に吹つ飛び、捕方らしい大勢の人間が四方へ蜘蛛の子のやうに散るのが見えた。

「やつた！」

と小源太は叫んだ。

「では僕等も……行け、諸君！」

その聲に應じ、藪陰や木蔭や、地にかゞんでゐた彼の同志たちが、一勢に、ドックの方へ走つて行く姿が、風雨と闇と火事の遠照りとの中に見られた。

「鴨下君！」

と小源太は庄三郎の手を握つた。

「いよ／＼お別れだ！……今では君が、明覚行者をさがし出し、葦山へ連れてゆき、良土を發見し、江川殿をして、大砲鑄造のための大反射爐建設の成功を祈るぞ！ お國のためだからなア」

「有難う！」

と庄三郎はいつて握られた手を強く握りかへした。

彼は先刻までは小源太に對し、いふべきことや反對すべきことやを持つてゐた。しかし明覚行者の

行衛を知らされた今は、抗議すべき何物もなく、有るものは感謝ばかりであつた。

『有難う！』

と庄三郎は再度感謝を籠めていつた。

『よく明覚行者の行衛を教へてくれた！……三木君へもお禮をいひます！……僕は明日ともいはず、暴風暴雨も物かは、今夜これから直ぐに梨本村へ！……明覚行者をさへ探し出して葦山へつれて行くことが出来たら！……もう夫れで……有難う！……使命は果され……』

『それにしても』

と小源太は感慨深かさうに、

『不思議な縁といはうか、宿命といはうか、敵となり味方となり、……いや、もう、それは云ふまい！……たゞ云ひたいは、過去一切のことを忘れて、この別れぎはに二人は親友として……』

『いや、兄弟として！』

『ナニ、兄弟！ おゝ兄弟！……さう迄思つてくれるか！』

『君は僕より年上だ！ 兄だ！』

『弟よ！……僕ア、赤道直下の、南十字星の輝く南洋で、君のことを忘れずに思ひ出さうよ！』

『僕こそ、富士を仰ぐごとに豪快の君のことを思ひ出すよ！』

『富士！ おゝ君こそ、清らかで、輪廓がハッキリしてゐて、志操不動で、富士のやうな男だ！』

『君は又何んといふ、變化縦横で規模雄大で、熱帯の海のやうな男だらう！』

『行くぞ俺は！ たつしやでくらせ！』

『君こそ！』

また二人は手を握りあつた。

火事の遠照りを背に浴びて、ドックの方へ走つてゆく小源太の姿を庄三郎は涙の眼で追つた。と、その時、

『急いで船へ！』

といふ聲が聞えた。

気がついてみれば、刑部者三人が立つてゐた。

『さあ對岸まで……送りませう！……急いで！』

『頼む！』

庄三郎は夢中で走つた。

海岸へ着いたのも、用意してあつた小船へ乗込んだのも夢中であつた。逆捲く波、吹きまく嵐、それを凌いで刑部者の漕ぐ船は、またしく間に越中島に着き、庄三郎が陸



へ上つた時、

『鴨下さーん』

と、船を漕ぎもどしながら、刑部者が呼んだ。

『私達ア落合や毛間の部落で、あんたに厭がらせをしたり、竹法螺吹いて仲間を集めて、あんたに仇をした奴等でごさんす。でも今ちやア後悔してをります！ 悪く思はないでおくんさいまし！……』

私達しも、本庄さんとご一緒に、南洋へ参ります！ 鴨下さーん、おたつしやで！』

『お、君たちこそたつしやで元氣よく、お國のために働いてくれ！』

漕ぎかへる船も見えなくなり、月島の遙かの一所で、火事ばかりが焰をあげてゐた。

雨にうたれ嵐に揉れながら、なほ庄三郎は岸に佇んでゐた。

### 梨本村で

……佇んで月島を眺めてゐる庄三郎に見えてゐるものは、今も盛んに燃えてゐる小源太の借家と、その火事の遠照りを受けて、島の向ふ外れの海岸に薄明るく立つてゐるドツクとで、ドツクは小供が玩具に使ふ積木の一個のやうに小さく可愛らしく見えた。しかしその向ふにひろがつてゐる海は裏白の黒布でも敷きひろげたやうに黒くひろがつてゐ、波頭が崩れる毎に裏の白地が見えるやうに波の穂

が薄白く、これも火事の遠照りに照らされて見えた。

忽ち、ドツクの邊から轟音が聞えた。

高い音なのであらうが、距離が遠いので、こゝへは、その餘韻のやうなものがとゞいたばかりであつた。

しかしその次の瞬間に見えた光景は長く庄三郎の記憶から忘れられないものであつた。

まづ玩具のやうなドツクが顛へるやうであつた。次に、左右の板壁がパーツと開き、それが海面へ倒れ、その後へ一つの物體が全然新規にあらはれた。

『船だ！ 改装船だ！ 南洋丸だ！』

と思はず庄三郎は叫んだ。

みる／＼船は沖の方へ迂り出した。

すると火事場の邊から狼狽した大勢の者の叫聲が喊聲となつて聞え、ドツクの在つた方へ御用提燈が無數に飛んでゆくのが見えた。

しかしもうその時には船は、沖の闇へ姿を没してゐた。

（行つた！ 見事の船出だ！ 暴風雨の夜に、傍若無人に！……あの意氣なら小源太氏は自分の意志を、目的を、遂げるだらう！）

(俺も自分の目的を！)

庄三郎は走出した。

嵐は彼の頬を撲り、雨は彼の體を衣裳の上から水びたしにした。彼はこのしげの夜を徒歩で、陸路を迂回し、下田在の梨本村まで行かうとするのであつた。

しかし彼は俄に足を止め、

『お鳥は！』

と呟いた。

(あの夜以來三日経つた。……さぞ心配してゐるだらう)

——遠い所ではない、ちよつと寄つて様子を見、事情を話し、衣裳も着かへ、雨具の用意もし……それで庄三郎はお鳥の家の方へ足を向けた。

『莫迦な！』

吐出すやうに庄三郎は突然云つた。

(雨具の用意とは何んだ！……大暴風雨を侵して、死を期して、遠い南洋へ船出した一團があるではないか！……陸路、下田在ぐらゐまで行くのに雨具の用意とは！……そんな心の弱いことではお鳥と會つて話してゐるうちに、今夜行くのが厭になり、明日などといふやうにならうもしれぬ！……行か

う！)

庄三郎はもう迷はなかつた。

風雨を突いて、目的に向かつて走つた。

その日から七日間風雨は關東一帯を荒れまはり、家を倒し、山崩れをおこし、人畜の死傷をさへおこした。

しかし七日目にはカラリと晴れて、伊豆あたりはわけても好天気であつた。

この日一人の武士が下田在の梨本村を天城山の方へ歩いてゐた。鴨下庄三郎であつた。彼はあの夜からずつと今日まで、旅をつゞけて來たのであつた。普通なら江戸から下田在までは七日とはかゝらないのであつたが、十年ぶりに見るといふやうなわけで、途中の橋が落ちたり往來へ出水があつたりして、意外に日數をつひやし、七日目にやうやく此處へ着くことが出來たのであつた。梨本村へ入ると、彼は、すぐに明覺行者のことを訊いた。すると村人は『行者様は、村から三里ほど山の方へ入つたところで、何やら修行してをられるやうです。普通の時でしたら其處へも行かれるのですが、大し、けで、山抜けがあつたり、出水がまだ引かなかつたり、それに山荒れで、山の獸たちが澤山下りて來て、饑ゑの爲に兇暴になつてゐて、うかく近寄ると危害を加へられるので、こゝ當分は行かれませ

ん』と教へてくれた。しかし庄三郎はそんな注意には避易しないで、かうやつて今その行者のゐると教へられた方角へ向かつて歩いてゐるのであつた。いかさま道はひどくいたんでゐて歩きにくかつた。そのうち道は無くなつて了つた。方角だけを宛にして進んでゆくより爲方なかつた。出水は山裾を奔流してゐるし、大石大木は山のやうに仆れて行手をふさいでゐるし一林そつくりが根こぎになつてゐたりしてゐた。それを迂回したり、流れは丸木で橋をかけたたりして、一町の道程を一時もかけ進むといふやうな有様となつて了つた。

やがて夕陽が、流れの岩の上に打上げられてゐる大蛇の胴を照らし、藪の裾に斃れてゐる山犬の死骸の牙を光らせる時刻となつた。

庄三郎は、その時、梢を焰のやうに夕陽に染め、幹や葉がその夕陽の陰影で鐵のやうに黒く堅く見える大杉林を迂回してゐたが、その林を廻りつくした時、

『おゝ、これは！』  
と思はずいつた。

大絶壁が行手に銅の城門のやうにそゝり立つてゐるからであつた。

左右から雄大な山が二つ逼つて来て、それが正に合はさりさうになつたところで中絶し、その間が空間になつてゐる。その空間を蔽ひ銅色をした絶壁が、屏風を立てたやうに垂直に、高さ六七十丈長

さ半里にも渡つて聳えてゐ、その裾の邊に見覚えのある明覚行者が、例の静子嬢より取上げた大御幣をついて佇み、その足許に山荒れで負傷したり饑ゑたりしてゐる野猪や鹿や野猫や猿の群やが集まつてうごめいてゐるのであつた。

庄三郎は明覚行者に逢へた嬉しさで夢中になり、山の獸に襲はれる危険も意とせず走寄らうとした。すると、悪夢のやうな事件が起つた。行者が、その垂直の絶壁を、非常に速い速度で駆けのぼり、豆のやうに小さくなつて頂上に達した時、その絶壁が、行者の駆けのぼつた足跡どほりに割れ、左右にひらき、その間に道が通じ、その道を目掛け、行者が、絶壁の頂上から、眞逆さまに身を投げたのであつた。

『あッ、行者は死んだ！』

庄三郎は恐怖と絶望とで地へひさまづいて叫んだ。

しかし明覚行者は死んだのではなくて二つの絶壁の間に立ち、左右の山の合はさり目の空間から射して来た夕陽を圓光のやうに背負ひ、此方を見てゐた。

『明覚様ア——ッ』

と庄三郎は、感激のあまりの悲鳴のやうな聲でひさまづいたまゝで叫んだ。

『私は鴨下庄三郎と申し……江川太郎左衛門の……江川先生は反射爐を……それで耐熱煉瓦を……そ

れに就いては良土を……千七百度の高熱に耐へる良土を……就ては行者様に……それにしても、その絶壁を……おゝ〜おう貴郎様は！……人か、神か！ 仙か！……その絶壁をお割りになり、道をおつけになるとは！』

しどろもどろに、順序もなくいつた。すると、

『鴨下さん、わたしは貴郎を知つてをります』

と、静かな、親切な、やさしい平和な聲で、行者はいつた。

『さうして私は、あなたの御希望を越中島の亂闘の際に耳にしました。……千七百度の高熱に耐へる煉瓦に必要な良土！ それをお求めになつてをられるとか！……お教へしませう！……その良土は、今私が割つた絶壁の間のこの道の土が夫れです！……それ、この土です！』

かういひながら行者は手に持つてゐた例の大御幣を、足許の地面へ突立て、

『私は地質には詳しく通じてをります。……ですから、疑はずにこの土を持歸り煉瓦をお焼きなさいまし、ご希望の耐熱煉瓦が出来ませう』

それから絶壁を見廻したが、

『よく割れてくれたのう。これで道が出来た。こゝへ道が出来さへすれば××村へも、△△の郷へも〇〇の里へも、下田港へも、廻り道をしないでも行け大變便利になり、人助けになるのだからのう、

よく割れてくれた。……いゝえね、鴨下さん』

と行者は、まだひざまづいてゐる庄三郎へ云つた。

『絶壁を割つたのは私ではなくて自然の力なのです。直接の原因は、七日間のしけで地層に變化が起つたことですが、それ以前から——數年、數十年、いやもつとの昔からこゝへ龜裂が入つてゐて割れようとしてゐたからです。……もし私に功があるなら、さういふ龜裂を發見し、いつ割れるかと毎年こゝへ来て、その龜裂の上を歩きまはつたことぐらゐです。……いや一切の現象はことごとく自然の力の現れです。……では是でお暇ませう。……これで私はなかく忙しいのですから……葦山へ参つて、江川先生にお目にかゝるもよいが、良土の在場所をお教へしたのですから、その必要もありません』

かう云つた時には、もう明覚行者は庄三郎へ背を向け絶壁の間の新しい道に向ふへ歩いてゐ、その後から負傷した獸たちが羊飼に導かれる羊のやうに穩しくついて行つた。

さうして、その後には、静子嬢の御幣ばかりが地に刺さつて残つてゐた。

庄三郎は、感謝と敬虔の眼とで何時までも行者の姿を見送つてゐた。彼には行者が矢張り奇蹟を行ふことの出来る偉大な人格者に思はれてならなかつた。

富士玲瓏

かういふ出来事があつてから月日が経ち、その年の秋の終りとなつた。  
或日、鴨下庄三郎は、一人の供に、静子媼の大御幣を持たせ、富士の裾野を毛間部落の方へ歩いてゐた。

この月日の間に彼の行つたこといへば、明覚行者に教へられたまふ、その土を探り、葦山に持帰り、恩師に逢ひ、これ迄の出来事を語り、土を差上げた結果、恩師によつて感謝され——江川太郎左衛門は庄三郎の手を取り押戴き、涙を流してその辛苦をねぎらつたといふことであるが——それから二人してその土で煉瓦を焼いたところ、果して、千七百度の高熱に耐へる耐熱煉瓦を焼上げることが出来た。この時の二人の喜びといふものは！それから江川太郎左衛門は、昭和の現代にも尙その遺跡を残してゐる大反射爐、即ち大砲の砲身を鑄るための建造物の建設にとりかゝり、庄三郎もその計畫にあづかる傍、人をつかはして江戸のお鳥親子の消息をたづねさせたところ、あの夜から程経た頃、毛間の實家へ引上げるといつて家を疊み、立去つたといふことを知つた。  
(お鳥とも逢つて、あの時代の好意を謝し、静子媼とも逢つて、御幣を返してやらねば……)  
そこで今日、恩師から数日の暇を乞ひ、かうして毛間部落のお鳥の家さして、旅をつゞけてゐるの

であつた。

彼は、曾ての日、明覚行者と静子媼とが、大法螺貝と大御幣との取合ひをした峠の道を、お鳥の家の方へ辿つてゐた。

ところが同じこの日、その峠道の一所で——それは四谷沼から流出してくる水が泉のやうに見えるほとりで、一つの可愛らしい事件が起つてゐた。

落合部落の長の左五衛門の娘お雪と、毛間部落の長の茂十郎の息子松太郎とが、手を引合ふばかりに親しく話しながら、その地獄へさしかゝつたことであつた。

『まあ、こんなところにこんなものが』

と云ひながら、泉のやうな小流れの横手の、萩のしげみの下に落ちてゐた紫の打紐をひろひあげたのはお雪であつた。

『まあ、これ、明覚行者様の法螺貝に捲いてあつた紐だわ』

『ほんに然うですね』

と云ひながら松太郎も顔を寄せた。

美男の松太郎と、美しいお雪とが寄せた顔は、芙蓉と白牡丹とが並んで咲いたかのやうに華やかに見えた。

『まあ何うしてこんな所に行者様の紐が？』  
『さあ？』

會ての日、こゝで静子嬢が、明覺行者の法螺貝を奪はうとして手をかけ、取りそこなひ、この紐ばかりが手に残つたところから、嬢が怒つて捨てたことや、その時明覺行者が、嬢から奪つた御幣に乗つて谷を渡りながら、

『頼朝公が富士の何處かへ埋藏したといふ黄金の在場所を知る秘密の鍵は、もう嬢へ渡した』  
と云つた言葉などを、この二人の若い男女は知らなかつたので、この紐がこんな所に落ちてゐることもが、たゞに審しく思はれるらしかつた。

『まあ、こんなところにこんな物が』

と云つて、お雪が、その紐の總の中に埋もれ隠されてゐた一つの鍵を發見して、掌の上へのせたのは、泉のやうな流れの側へ二人が歩いて來た時であつた。

『鍵ですね』

といつて松太郎は又お雪の顔の側へ自分の顔を寄せ、錆び古びてゐる小さい鍵を覗くやうに見たが、  
『おや、鍵の柄に文字が彫りつけてありますね。……建久四年五月と彫りつけてある。……建久四年五月といへば源頼朝公がこの富士の巻狩をした時ですね』

『さうよ。ではこの鍵はその頃につくられた鍵ね、随分の古物なのね。……でも何うして明覺行者様はそんな古い鍵をこんな紐の總の中に隠しておいたのでせう？』

『あゝいふ偉い方のおやりになることは私たちにはわかりませんよ』

『ほんとに然うね』

と云ひ／＼お雪は足許の小流れへ眼をやり、

『咽喉がかわいて水がのみたいわ。でも此處の水濁つてゐるわね。泉の湧口へ行つたら澄んでゐるかもしれないわ。……行つてみませう』

『行つてみませう』

そこで二人は、熔岩の裂目を、小流れに添つて奥の方へあるいて行つた。二人は戀人同志、許婚同志、それも數日後に婚禮の式をあげる運びになつてゐる仲であつた。あの夏の或日、この上の四谷沼のほとりで、落合と毛間との部落民が、死闘を行つた際、いかに松太郎がお雪の身を案じ、怪我させまいと、自分の身を犠牲にして、かばつたことか！ その劇しい愛情がお雪の心を擽つて、松太郎を愛するやうになり、又、二部落の人達は、その長の、左五衛門、茂十郎をはじめとし、一同、あの時、不思議な力を持つた明覺行者の貝の音を聞いて、死闘をやめて以來——いはゆる雨降つて地かたまるで、却つて親しくなつた。そこで改めてお雪と松太郎との結婚が問題となり、今度こそ異議なく

整つた。

今日も左五衛門は婚禮の打合せのため娘をつれて、茂十郎の屋敷へ来てゐるのであり、親と親との相談の隙をうかゞひ、許婚の戀人二人は、楽しいさまよひを此處へ行つてゐるのであつた。

やがて二人は小流れの源まで来た。するとそこには泉は無く、鐵で鑿はれた頑丈な水門の扉が立つてゐた。「まあ」「これは」と二人とも驚きながら、扉に見入つた。扉の一所に鍵穴があり、その側に文字が彫つてあり、建久四年五月と讀まれた。「まあ」「これは」と又二人は云つて顔を見合はせた。二人には、この水門の向側が四谷沼であることがわかつてゐた。さうして、この水門の扉をあけたなら、四谷沼の水が流出して、沼の乾くこともわかつてゐた。

お雪が手に握つてゐた鍵を鍵穴へはめると、鍵は鍵穴に納まつた。一ひねり捻つたならば鍵が外れ水門の扉がひらくであらう。

でも、この現象は何う解釋したらよいのであらう？

建久四年五月に源頼朝が富士の卷狩をした際、莫大な黄金を、後日の軍用金として、鐵の唐櫃の幾個か幾十個かへ入れて、四谷沼の水底へ隠し沈めたと解釋したら？

「鍵をひねつてみませうか」

「でも、鍵をひねつて水門をあけたら、流れ出る水で私たち溺れますよ」

『さうね、こはいわね』

二人は引返すことにした。もし二人が、おぼこい、劇しい、純愛に溺れてゐるのでなかつたら、例の埋藏金の傳説と鍵と水門と建久四年云々の年號とを關聯させて考へ、この事實を部落の人々へ話して、四谷沼の水を干して、埋藏金の有無をたしかめたかもしれないが、この時の二人は、そのやうな物質的問題より、『心の問題』の方が主になつてゐたので、鍵を鍵穴へさしこんだまゝで引返し、引返しにかゝつた時には、もう心の中から、鍵のことや水門のことは忘れられてゐた。

二人が、小流れに添つて、熔岩の間の徑を歩いてゐる時、鴨下庄三郎は、靜子嬢の大御幣を持たせた供をつれて、峠の道を、お鳥の家めざして歩いてゐた。さうしてその二人が峠の道を左の方へ曲つた時、お雪と松太郎とが峠道へあらはれた。だからこの二組の人たちは顔を合はせることが出来なかつた。

さて庄三郎は思出深い四谷沼の岸を通りお鳥の家の、生垣をめぐらした前庭へ入つて行つた。

陽あたりのよい縁側の上に一束ねの襦袢がかたまつてゐた。それは襦袢のやうに見える靜子嬢で、嬢は古足袋を刺してゐた。彼女は明覺行者が彼女の御幣に乗つて海をわたり、何處へともなく行つて了ひ、御幣がふたゝび自分の手へ返らないと知るや、すつかり意氣沮喪し、廢人になつて了ひ、お鳥につれられて、この自分の家へ歸つて來てからも、勸請してある淺間神社の前へ坐らうともしない

で、たゞウツラ／＼としてゐた。

今もウツラ／＼として古足袋を刺してゐるのであつた。でも彼女は、誰か庭先へ人が入つて来たことには気づいたとみえてオズ／＼と顔を上げた。庄三郎を見たが誰だかわからないやうであつた。しかし、供人が地に突いてゐる御幣へ眼を止めるや、彼女は俄然別の人間に一變した。最初彼女は疑はしさうにその御幣を見てゐたが、それが自分の魂の分身ともいふべき大御幣だと認るや、猛然と形容したほどの勢ひで立上がり、跣足で庭へ飛下り、供人へ走りより御幣を奪取り、頭上で振立て、『お鳥ヨ——ッ、御幣が歸つて来たぞヨ——ッ』と呼び、庭を駆け廻りだした。

すると、その聲に應ずるやうに母屋の薄暗い部屋の奥に立つてゐる襖を開けて——襖が開いた時、その奥の隣室に設けられてある淺間神社の神棚のお燈明が、星の群のやうに輝いて見えたが、其處からお鳥が姿をあらはし、縁側の方へ歩いて来た。

その姿を見ると、それ迄、靜子媼の激情的行動に驚き、茫然としてゐた庄三郎が、いよ／＼驚へつやうに、

『お……これは！……いや、まるで……』  
といつた。

まるで神女のやうだ！ と、かう云ひたかつたらしい！

巫女の着る白の行衣を着、髪を下げて背へ垂したお鳥の姿は、その澄みきつた顔——非人情的とも云ひたいやうな表情と相俟つて、まつたく神女のやうに神々しく見受けられた。

彼女は庄三郎を見てもその表情を變へなかつた。しかし、庄三郎が數ヶ月前まで一緒に住んでゐた『心の戀人』であることは意識したらしく靜かに一揖した。

庄三郎は、彼女と逢つたなら、彼女から泣かれたり怨まれたりされるものと思つてゐた。さうして自分もそれに答へてこれ迄の經過を話し、納得させ、お詫びをしようと思つてゐた。ところが逢つた結果はこの有様である。今は縁の上で立ち陽の光に全身をさらして立つてゐるお鳥の——以前から傾城の巷などにゐた女とは思はれない程清淨な、神性的の風貌の持主であつたが、その風貌が、いよいよ清らかになり、超人的にさへ見えるのに對し、庄三郎は、

（何んといふ變りやうだ！……何んといふ立派さだ！……武士の妻として、もこれでは申分がない！……それにしても何事がこの女をかうも變へたのであらう？）  
と思つた。

『お鳥殿』と、やがて庄三郎は、貴婦人へでも云ふやうに云つた。

『私ことお蔭をもちまして、明覺行者様にお目にかゝり、良士の在場所を教へていただき、師匠より



の使命を果しましてございます。……既に反射爐は建造中、今に、日本の國防に資する江川式の大砲が續々と製作されることゝ存じます。……これも貴女様のなみくならぬご援助を得ましたからでありまして、厚くお禮申し上げます』

するとお鳥は眉一つ動かさずに、  
『お芽出度くお祝ひ申し上げます。……それも神様の思召しからと存じます。……今は、母に代つて神に仕へ居ります妾……これ以外には何も……』

この時、神祠の祭つてある奥の部屋から、静子嬢の、正氣に返つた、ハッキリした、澄みとほつた祝詞の聲が聞えて來た。

『しばらく』

と云つたかと思ふとお鳥は、行衣の袂を翻しながら、奥の部屋へ入つて行つた。  
静子嬢は、二人の話してゐる隙に、御幣を抱へて、奥の部屋へ行つたものらしい。  
しばらくの間は静かであつた。

庄三郎はあたりを見廻した。庭は綺麗に掃ききよめられてあり、家鶏は餌をあさつてゐる、生垣の葉は深紅に染まつてゐる、陽だまりには渡鳥が集まつて轉つてゐる、平和が隅々にまで漲つてゐた。  
(いゝなア)

と思つた。

それでゐて庄三郎は心の何處かに大穴でも開いたやうな、限りない不満を感じた。

(こんな筈では無かつた!)

何が? お鳥の非人情的の態度が! お鳥の超女人的の表情や言葉が!

(昔のお鳥の方がいゝ!……今のお鳥は尊敬すべき女かはしらないが、愛すべき女ではない!)

庄三郎は次第に心のイラ／＼するのを覺えて來た。

と、その時、奥の部屋から、お鳥がころがるやうに走り出して來たが、

『庄三郎様ア——ッ』

と、全靈魂と、全肉體とで泣くかのやうな悲しい聲で叫びながら、庭へ驅下り、庄三郎へ縋付いた。  
見ればお鳥は、巫女の行衣を脱いでゐた。

烈しい感情の湧立つたまゝに、お鳥は叫び、お鳥は泣いた。

『庄三郎様ア——ッ、ようこそお歸り下さいました! お鳥の側へ、お鳥の許へ!……あの夜、越中島で、お別れして以來、おゝ／＼わたしは、このお鳥は、夜となく晝となく、どんなに貴郎様のお歸りをお待ちしてをりましたことか!……それなのに、お歸り下さいません!……一月の間あの家で、放心し廢人となつた母を相手に、たゞ二人でおゝ／＼どんなにお待ちしてをりましたことか!……こ

の家へ歸つて参りましてからも、もしやお出でゝはあるまいかと、門の戸があげば出て見、足音がすれば出て見……泣いて、怨んで、神様に願かけて……でも、その中、母が廢人になりました、巫女になりはひがゆき立たず……食べることが出来なくなりましたので、わたしが代つて巫女となり、白衣の行衣を着まして、浅間様へお仕へするやうになりましたから、少し心がおちつきましたもの……矢つ張りお待ちしてをりました。……でも心に決心し、人間のことは思ひ切らう！ 浮世のことは忘れよう！……でも矢つ張り忘れず！……おゝくおゝ庄三郎様ア——ッ、ようお歸りなされて下さいました！ この喜び！ この嬉しさ！……いゝえ嬉しさはわたくしばかりではございません！……母の祝詞をあげるあの聲をおき下さいまし！……御幣の返つた嬉しさに、正氣づき、眞人間に歸り！……もうわたくしは、巫女から身を引いてもよいことになりました。……行衣は母へ返ししました。行衣を脱げば昔どほりのお鳥！……庄三郎様ア——ッ、ようこそお歸り！」

庄三郎は、掻口説くお鳥の言葉を聞いてゐる中に、充ち足りなかつた心が充ち、空虚であつた心の穴が、次第にふさがれて行くのを感じ、強い、烈しい、新鮮の愛情が——お鳥に對する愛情が、海潮の湧くやうに、胸の底から湧くのを感じた。

「お鳥！」

と満眼に涙を湛へ、

「今こそお前はわしの者だ。もうわしはお前を何處へもやらぬ！……お鳥！ お前はわしの妻だ！」

「……………」

喜悦以上の、感謝以上の感情が涙となつて、お鳥の眼から止め途も無く……

この間も、巫女としての自信を取返した静子嬢の祝詞の聲は、奥の部屋から聞えて來た。

この日、好日！ 空に雲無く、遙に見える四谷沼の水面が『黄金以上の物かしこにあり！ 男女の誠心！』と云つてゞもゐるかのやうに、暗示深く輝いてゐた。

× × ×

松太郎とお雪とが結婚したのはそれから一月ほど経つた後のことであり、お鳥が、江川太郎左衛門の娘分として、鴨下庄三郎へ嫁入りして來たのは、それから半年ほど経つた後のことであつた。

建設された大反射爐からは、續々と大砲が鑄造され、國防國家に役立つたことは歴史に明かな如くである。

庄三郎夫婦の日課の一つは、毎朝富士を拜むことで、富士は、その幸福の若夫婦の心さながらに、いつも玲瓏としてゐた。

—「先驅者の道」完—

昭和十七年十二月十一日印刷  
昭和十七年十二月十五日發行

(初刷一五、〇〇〇部)

先驅者の道

Ⓢ 定價 一圓八十錢

著者 國枝史郎

發行者 伊藤 彰

印刷者 青野 仙吉

株式會社 青野印刷所  
東京市芝區田村町四丁目二番地

發行所 株式會社 今日の問題社

東京市芝區田村町四丁目十八番地  
振替東京 五九七四八番  
電話芝(43) 四六二五番

配給元 日本出版配給株式會社

東京市神田區淡路町二丁目九番地

不許複製  
出文協承認  
ア280352



(會員番號 110560)

# 新大衆文藝叢書

新時代の大眾文藝として最近大評判の名著

- |        |             |                  |
|--------|-------------|------------------|
| 村雨退二郎著 | 黒潮物語        | 價B6判並製<br>一圓六十錢  |
| 甲賀三郎著  | 印度の奇術師      | 價B6判並製<br>一圓六十錢  |
| 城昌幸著   | ちりめん蜘蛛      | 價B6判上製<br>一圓八十錢  |
| 國枝史郎著  | 天明大捕物       | 價B6判上製<br>一圓八十錢  |
| 城昌幸著   | 緋ぼたん系圖      | 價B6判上製<br>一圓八十錢  |
| 戸川貞雄著  | 勤王浪人平野國臣(上) | 價B6判並製<br>各一圓八十錢 |
| 國枝史郎著  | 先驅者の道       | 價B6判並製<br>一圓八十錢  |

今日の問題社

# 新銳文學選集

- |      |         |  |
|------|---------|--|
| 野村尚吾 | 旅情の華(1) | 旅から旅を渡る父と子の愛情の連続を逞しい筆致で描いたもの。の男を知る母とその娘の純情な心を美しく描いてゐる。           |
| 中島敦  | 南島譚(2)  | これは美しい南島物語である。土人達の夢のやうな傳説に取材して、しかも架空な小説でなく、そこに土人達の生きた生活圖が描かれてゐる。 |
| 南川潤  | 白鳥(3)   | 人生の穢れた生活から、雄々しく立ちあがつてゆく若き女性之心を、著者は細心に描いて讀者に見せてゐる。                |

- |       |        |  |
|-------|--------|--|
| 井上友一郎 | 雁の宿(4) | 二つの異つた性格をもつ兄妹を纏つて、運命はいち早く巡る。二時として離別しながら親のない妹愛に生きる。   |
| 長谷健   | 新星座(5) | 時代の流れは、遂に小學校を國民學校と塗り變へた。若き女教師の胸底にも、涙ぐましく立ち上る女教師の生活圖。 |

以下續刊

〔各冊〕  
B6判三〇頁・フランス製本  
鈴木信太郎裝幀・價一圓六〇錢

今日の問題社

# 日本歴史小説選集

大いなる歴史の發展期に立ち更めて日本及び日本國民の足跡に愛情を持たしめるための——全篇書下し長篇歴史小説

## 鳳輦京に還る

(近刊) 龍膽寺雄著  
想を練ること数年、建武中興御偉業の真相と、大塔宮と村上義光御主従の忠誠とによつて表現され、た神國の精華と大君のへのこそ死なめ、ひしと民的情熱と一み民われの感激とは、ひしとして吾等の眞情にこだまする。

## 大化の改新

(近刊) 倉田百三著  
雄渾の氣魄、優美の情緒、天眞の流露等北大和の風土と萬葉的民俗とを背景として全篇に漲る日本精神の高揚の歴史の自覺とは昭和維新の現實に直面する讀者の胸を強烈に搏たすにはおかない。

## 源平戦紀

(近刊) 長田秀雄著  
優美ではあつたが纖弱な女性的文化の享樂者平家とあくまで剛健な鎌倉武士源氏とが對立の時代の當時の國民生活の様相を描きわが國武士道の眞髓を浮彫した。頼朝義經兄弟の葛藤に人間の宿命を感じしめる。

各巻B6判四〇〇頁美本・價一圓八十錢

### ◇續刊豫定◇

笹本 寅

## 會津戦争

明治維新に於ける會津武士の眞骨頂。

加藤武雄

## 松尾芭蕉

「さび」もまた日本民族の性格だ。

橋本英吉

## 炭坑

北九州の炭坑にその創業時代の苦心と戦ひぬく數奇な人生。

大池唯雄

## 林子平

烈々胸をうつ幕末の勤王家の生涯!

以下——

今日の問題社

終

